# 過去の戦いから未来の平和へ

第一中学校　二年
齋藤　司

平成という平和な時代に生まれ、変わらない日々をすごしてきた私からすれば、八月九日という日はただの一日にすぎない。しかし、七十六年前の今日を経験した人は特別に恐ろしく、忘れることのできない日なのだろう。

沼津市立図書館で、戦時中のパネル展が開催されていた。そこで見た一枚の写真で私は悲しい気持ちでいっぱいになった。「焼き場に立つ少年」（ジョー・オダネル撮影）という題名の写真は、小学生ぐらいの丸刈りの少年が、死んでしまった小さな弟を火の中に入れる時のものだった。直立不動で、これから弟が焼かれる火の方をじっと見つめている様子だった。私がもし同じ立場だったらと考えると、その少年は勇気があると思ったのと同時に、少年の瞳から私は、「僕の大切な家族をうばった戦争に負けてたまるか！泣いたら僕の負けだ！背中の弟の分までがんばって生き抜くぞ」という強い思いを感じた。しかし少年の本当の気持ちは、簡単に想像できるものではないと思った。沼津市は昭和六十二年三月二十日に核兵器廃絶平和都市と宣言したことを知った。世界では今、二万発以上の核爆弾が保有されている。これは、地球上の人間を五度も全滅させる量だと言われている。この宣言を世界中の国がしなければ、同じことがどこかで繰り返されてしまうと思った。

沼津にもいくつかの戦争遺跡があると知り、今私達が住んでいる場所も被害にあったことにとても驚いた。私は、子供の時に機銃掃射を体験した祖父に話を聞いた。私の曾祖母は戦時中の疎開先でアメリカの機銃掃射を受けた。その時、私の祖父をふくめた三人の子供達と一緒に小川に飛び込み助かったそうだ。周りでは何人もの大人や子供が犠牲になってしまったらしい。何の罪もない人々の命が奪われ、幼い子供が、親を失ってしまった。その話を聞いた時、親を失ってしまった子供がどのように成長したのかを、私は想像することもできなかった。当時親を失った子供が感じた不安や不自由は、今私が生活している中で感じているものとは、比べものにならないと思った。また、話を聞いた時私は、何とも言えないつらい気持ちになった。かけがえのない大切な命を一瞬にして奪われてしまうのが、戦争だということが分かった。戦争は本当に恐ろしい出来事だ。

私たちは、実際に戦争を経験したわけではない。さらに当時を経験した人も、少なくなってきている。だからこそ、私たちが戦争について多くを知り、伝えていかなければならないと思う。

今私が、核爆弾を保有する国が無くなるように願ったところで何も変わらないかもしれない。しかし、少しでも多くの人が同じように平和を願うことが大切だと思う。この平和な時代に生まれたことを感謝し、争い事なく譲りあう気持ちを多くの人が持ち続けることが大切だと考える。私は、当たり前のように食事をし、部活動に励むことができている。平和な時代しか知らないからこそ、平和の大切さを忘れて

しまっている。この平和であることが当たり前の生活を守り続けるためには、戦争の残酷さを知り、平和である幸せを実感して日々の生活をすごさなければならない。

戦争により多くの大切な命が失われた。その人達の分まで命を大切にし、平和な時代を守り続けることが、戦争で亡くなった人への恩返しになると思う。

日本の平和だけでなく、核爆弾を保有する国がなくなり、世界中で争いがない平和な世界になることを私は願う。尊い命が争い事により失われないように…。

# 僕たちの日々

第一中学校　三年
山田　薫琉

何も起こらない今日が終わる
何かをしなければならないと思いながら
何もできなかったことにため息をつき
明日は何をしようかと考え目を瞑る
刺激のない僕たちの平和な日々
当たり前のように生きている日々

戦時中の日々

何かが起こり今日が終わる
国のために成果を得なければならない
何もできずため息をつき
明日はどう生き延びようかと怯えながら目を瞑る
地獄のような日々
一生懸命生きようとした日々

同じようで全く違う日々
鳴り響くサイレン　爆音　一面の焼け野原
友を失い　家族を失い　仲間を失い
いくつもの命が奪われた日々
それでも生きていかなければならない日々

知らなければならない
考えなければならない
語り継がなければならない

何気なく生きている日々
今もどこかでくすぶっている
僕たちもいつ向かうかわからない
人々が一生懸命生きた日々を思い

決して無駄にしない
刺激のない日々を
価値のある日々にするのだ
それこそが今あるべき
僕たちの日々

# 世界中の人が毎日を笑顔で暮らすために

第二中学校　二年
古川久遠

平和の祭典である東京オリンピックが行われた今年、七十六回目の終戦記念日を迎えました。食べ物に困らない幸せ、勉強ができる幸せ、野球ができる幸せ、たくさんの幸せは当たり前の事ではなく平和のもと成り立っていると思います。僕は改めて戦争、平和について考えました。

僕と同じ中学生が家族が多いため、食べ物が少ししかなく、少しでも家族が楽になればと軍隊に入ったことや八月十五日の終戦を告げる玉音放送が流れる六時間前に出撃し、亡くなった方がいたということを知りました。自分の分の食べ物を幼い兄弟に分けあたえることができ、自分自身も多少なりとも食事は保証されるという理由で命の危険がある軍隊に入隊したということに驚きました。それほどまでに食料難の時代であったことや家族を思う気持ちに目頭が熱くなりました。

沼津でも七月十七日に空襲があり、目の前で家族を亡くした方が多くいました。一晩で二百七十四人が亡くなり沼津の町は焼け野原になりました。身近な所では、御成橋に焼夷弾の跡が残っています。僕は、広島、長崎の原爆や東京大空襲などは、どこか遠い世界のできごとのように感じていたけれども、自分が生活する身近なところでもとても大きな被害を受けていたことを知り、他人事ではなく自分事としてとらえる気持ちに変わっていきました。二小、二中校区にはたくさんのお寺があり、そのお寺に多くの子供が疎開していました。国語の授業で「字のない葉書」という話を勉強したことが思いうかびました。字をかけないほど幼い女の子がひとり親元をはなれて疎開し、元気でいたら丸印を書いて毎日葉書を投函するという話です。もし自分だったらとても不安でさびしく毎日毎日泣いていたと思います。沼津大空襲は、祖母が暮らす獅子浜でも大きな被害がありました。地域の戦争を経験した方々が被害を後世に伝えようとお話してくれた資料を読むことができました。静浦小がねらわれて爆撃され、焼夷弾が目の前にたくさん落ちてきました。獅子浜の村は火の海だったそうです。戦火の中浜へ逃げ海の中へ子供をおんぶして上からふとんをかぶり沈んで朝まで海の中で必死にたえたことが書かれていました。「その時の必死の気持ちは一生忘れません」や「生きている気はしなかった、とても生きてられないと思った」と記された言葉にどれほどの恐怖だったのか、

生きるか死ぬかの極限状態は、僕の想像をはるかにこえる恐ろしいことだと心から思いました。

今回、より深く戦争被害を知り、あのような恐ろしく、悲惨な戦争はもう二度としてはいけないと強く思いました。

今、戦争を経験した人が減ってきています。そしていつかはゼロになってしまいます。そんな中戦争をしないために、自分ができることは、戦争を体験した方の話をうかがい、戦争についてしっかりと学び、戦争の怖さ、悲惨さを次の世代へ語り継げるようにすることだと思います。自分の国だけの利益ではなく国や人種に関係なく互いに手を取り合い協力し合い、宗教や考えは違えど認め合う優しい世界になっていけば、世界で起きている戦争は、だんだんと減っていくと思います。ですが世界の人々の気持ちが同じ方向に向かうことはとても難しいことです。それでも少しずつそういった世界になっていくためには、ひとりひとりが少しでも「戦争をしてはいけない」という考えを持ち続けていくことが大切だと思います。そして世界中の人が毎日を笑顔で暮らせる世の中になればと思います。

# 忘れてはいけないこと

第二中学校　二年
増田純大

今年で終戦から七十六年が経ちました。テレビでも、戦争についての特集をやっています。そんな一方で、戦争を体験したことのある人はどんどん少なくなっています。僕の周りには戦争を体験した人はいません。学校の授業で習った事やテレビを見たり、本を読んだりした事しかありません。今の日本は戦争をしている頃に比べたらすごく幸せです。しかし、世界には今もテロが起こったり、貧困で子供でも学校に行かずに働いたりと、苦しんでいる人達がたくさんいます。戦争は日本にとっては昔の出来事ですが、世界では、似たような事が今も起こっています。そう考えると、日本で戦争がもう起こらない保証はないと思いました。二度と太平洋戦争のような悲惨な出来事を起こさないためにも、もっとこの事について知ろうと思い、太平洋戦争を調べてみました。

太平洋戦争は、今から八十年前の一九四一年の十二月八日に、日本軍によるアメリカ・ハワイの真珠湾攻撃によって開戦しました。この頃、日中戦争や日独伊三国軍事同盟などの出来事があり、アメリカとの対立が深まっていったことが、太平洋戦争の開戦の原因と言われています。真珠湾攻撃は成功し、日本の緒戦は快進撃を見せていました。

しかし、その後のミッドウェー海戦という、ハワイの北西にある島での戦いや、ガダルカナル島の戦いという、オーストラリアの北東にあるソロモン諸島の島々での戦いでは、守ることに精一杯になってしまいました。そして、日本の広島や長崎に原子爆弾が投下され、多くの犠牲者が出たことで日本は降伏し、敗戦という結果で終戦になりました。当時の日本は全てを国に、戦争に差し出すことが求められていました。戦争中の食事にお米は無く、代用としてさつまいもやじゃがいもなどの葉や茎まで、普段は食べないような食べ物を食べて生活をしていました。服装も今のように自由に選んで着ることは出来なくて、国で決められた服を着るしかありませんでした。僕と同じ男子中学生は学校の授業で、陸軍の人から行進の仕方や銃の撃ち方、手榴弾の投げ方など色々なことを教わっていました。

「貴様ら、次は太平洋の真ん中で会おう。」

軍事教練が終わり、別れの時に陸軍の人が言った言葉だそうですが、心の中で嫌がっていた中学生も少なくなかったそうです。一方、女学生は、工場で働かされたり、医師でもないのに疎開先で医師として生活したりしていました。子供達の死を目の当たりにしたこともあったそうです。血が繋がっていないとはいえ、目の前で人が亡くなっていて、とても辛かったと思います。あの頃の男の人は

『戦争に行って死ぬのが当たり前。』

と、病気などを持っていない限りは必ず軍に入り、戦わなければいけませんでした。一方女の人も、

『軍のために働くのが当たり前。』

と、軍服を縫ったり、航空機の部品を造ったりしなければいけませんでした。

今の日本は、国民一人ひとりが自分の意見を尊重されることが無い不自由なあの頃とは違い、自分の意思で自由に行動することが出来ます。しかし、長崎には原爆に遭っているのに、国が決めた被爆地域の外だったことを理由に被爆者として認められず、救済がまだもらえていない、という人もいます。太平洋戦争はまだ終わっていません。世界中から核兵器を無くし、戦争という存在がこの世から消えることが、本当の終戦だと僕は思います。

# 平和と違いと多様性

第二中学校　三年

西原秋音

平和というものが、いかに尊く、そして実現することがいかに難しいのか、最近実感することが増えてきました。

私が戦争について学ぶ・知るツールとして、主に社会科の授業や、テレビ、本などが挙げられます。社会科の教科書には、昔起きた大きな戦争について記されています。長年に渡る戦いも、ほんの数ページでまとめられていると、何だか味気なく、紙面上ですから戦争をただの事実、というふうに冷たく受け止めがちです。しかし、映像で見て

みると受け止め方が大きく変わりました。人が実際に殺されているのです。そのことを実感してからは、戦争の見方が変わってきました。

近代に起きた太平洋戦争は日本に大きな関わりがあり、身近にも体験者がいるため私の中でとても印象的です。この戦争では多くの日本人が殺害されており、そのさまは同じ日本人としてもとても痛ましく思えます。また、日本は太平洋戦争で、世界で唯一原子爆弾を落とされた国になりました。そんな戦争の痛みを知る日本の国民としても理解を深め、平和についてよく考えたいと思いました。

平和について調べてみると、戦争や暴力で社会が乱れていない状態のこと、と定義されていました。それを知ると、国や、世界が平和となるのは難しそうだと思いました。世界で最も平和だとされる国はアイスランド、最も平和でないとされる国はアフガニスタンで、日本は九位、日本の文化に影響を与えている韓国は五十五位、中国は百十位、アメリカが百二十八位でした。アフガニスタンではテロや内戦が多い一方、アイスランドは非常に治安が良く、家や車に鍵をかけないことも普通だそうです。今の日本では考えられませんよね。更にこの平和な国では性に関しても柔軟な考えをもち、人種差別もなく、結婚や家族に対する考え方も自由だそうで誰もが平等です。そこで私は、人種差別や性差別など、人と人との差がないこと、つまり平等さは平和につながるのではないかと思いました。

紛争や、戦争が起こる原因として民族や宗教の違いが挙げられるでしょう。最近問題になっているアフガニスタンの紛争は宗教問題です。違いから戦争など争いは起こりがちですが、違いをなくせば本当に平和に繋がるのでしょうか。同じ人間なんていませんし、違いがあることで良いことも沢山あります。多種多様な人々が意見を出し合えば、色々な考え方を知れたり、違う角度で物事を見られたりできることで社会はより豊かになることでしょう。この違いが嫌だ、と思ってしまえば争いにもなりますし、良い、と思えれば社会がより良くなる……やはり要は考えようによるのです。平和を実現するには違いを厭(いと)わずに共存することが大切だと思います。これが多様性（ダイバーシティ）です。

多様性という言葉は、最近よく耳にすることが増えてきました。多様性は国際社会において当然の権利として確立されており、マイノリティの権利を保ち、性差や価値観に左右されない明るい社会の実現に向けた動きを促進させています。性別・国籍・人種・年齢など様々な違いを問わず、多様な人々を認めることができれば、平和への第一歩となると思いました。

戦争は人の命が簡単に失われてしまう、あってはならないことです。そんな悲劇をおこさせないためにも、違いを認めることはとても大切だと思いました。今、世界で起きていることに耳を傾け、興味・関心を持ち、みんなで考えていく――。国境という垣根を越えて世界中が協力し合っていきましょう。そのためにもみんなが多様性を認めることが戦争をなくし、平和にするために重要だと思います。

# 僕の責任

第三中学校　一年
留目実來

僕は戦争について詳しく知るため、修学旅行で広島に行ったことがある姉に話を聞いた。ちょうど空一面を鮮やかな朱色が覆い尽くすような夕方だった。その時姉が、

「夕陽が怖い人もいるんだよ。」

とつぶやいた。その日の夕空は、本当にきれいで、正直僕は、夕陽が怖い人がいるなんて信じられなかった。だから、僕は姉にその言葉の真意を聞いてみることにした。

その時姉は、いつになく真剣な表情で、語り部の方から直接被爆したときの話を聞けたことや、深く印象に残ったことなど詳しく話してくれた。

修学旅行で原爆ドームや原爆資料館を訪れた姉は、最後に語り部の方から一時間ほど当時の体験談を伺ったそうだ。語り部の方たちは、実際に戦争を経験し、後世にその体験を二度と繰り返してはいけないということを伝えるために活動している。姉が会った語り部の方は、自分の母親と姉を原爆によって失ったそうだ。軍需工場で働いていて、その工場が原爆が落ちた場所から少し離れていたために命拾いしたのだという。原爆投下後、その方が姉を探すために川へ行ってみると、死体がゴロゴロ転がっていたというが、僕にはその様子がとても想像できない。僕より七つ上の姉たちの世代は今は撤去されてしまった被爆者を模した蝋人形を撤去寸前で見ることができたらしい。姉は、その人形の焼けただれた肌や目のない人形を見て、資料館入館後早々に言葉を失ったと言った。

しかし、語り部の方によると、その蝋人形でさえ再現できていると思えないほど実際に被爆した人たちの様相は酷く凄惨なものであったらしい。そして、その原爆が落ちた瞬間の閃光や爆発は、よく「ピカドン」と表現されるが、その「ピカ」の直後の街が燃え上がる様子が真っ赤な夕陽と重なり、今でも原爆が落ちた瞬間を思い出させるため怖いのだと姉たちに語ったそうだ。

八月六日や九日になると、広島や長崎での追悼式の様子がテレビのニュースで流れている。僕は、日本は第二次世界大戦で唯一原子爆弾が落とされた国で、沢山の人が犠牲になったことは知っていたが、強い思い入れはなかった。しかし姉を通して語り部の方の話を聞き、初めて戦争というものがいかに凄惨なものかを真剣に感じることができた。また、原爆がもう二度と絶対に使われるべきではないこと、今の僕たちがいかに平和で幸せな生活を送れているかということをひしひしと感じた。

僕は、今回姉から話を聞いたのだが、新型コロナウイルスの感染拡大が終息したら実際に広島に行き、資料館を訪ね、語り部の方から直接話を聞きたいと思っている。戦争を実際に体験し、記憶が残っている方のほとんどが八十歳を超えており、直接話を聞くことができるの

は僕たち世代が最後になるからだ。姉からも直に話を聞くべきだと言われた。僕はあと数年で大人になる。だが、その時には僕の願いは叶わないかもしれない。

僕には、語り部の方たちから実際に戦争の話を聞ける最後の世代としての責任がある。僕自身がしっかりと後世の人たちに「二度と戦争を繰り返してはならない」と伝える責任が。

# 真っ赤なトマト

第三中学校　三年
朝倉　卓叶

昭和二十年一月九日、沼津市にアメリカ軍から爆弾が落とされました。最終的に沼津市からは、死者三百十八人、重軽傷者六百三十一人、戦災人口四万四千三百八十七人、戦災戸数九千七百戸の、空襲による被害が出ました。

おじいちゃんもその被害者の一人です。おじいちゃんは、当時六歳で、両親二人と兄弟三人の計六人家族でした。おじいちゃんは育てていたトマトが食べたかったけれど、明日には真っ赤になっていると家族に言われ、明日おいしいトマトが食べられることを楽しみにしながら、その夜寝ました。その晩に空襲が起こりました。アメリカ軍のB29という飛行機がすぐ近くの空を飛んでいて、すごく怖かったそうです。家族で近くの防空壕に逃げましたが、お父さんにここはだめだと言われ三園橋の下に逃げました。おじいちゃんとそのお父さんがどうしようかと会話をしているその時、真横に爆弾を落とすために使われる鉄の板が落ちてきたそうです。あと少し横にいたら、爆弾は確実に二人の所に落ちて、死んでいたということです。

次の日起きたら、隠れていた橋も燃えてなくなり、街中が焼けてほとんど何も残っていなかったそうです。食べようと思っていたトマトは、真っ赤ではなく真っ黒になってしまいました。食べられなかったことよりも、真っ黒な姿になったトマトを見て悲しくなったそうです。

毎日食べるものがなく、本当につらい生活だったと話を聞きました。戦争で焼けて店はなくなったのですが、飢えをしのぐためにその食べ物屋さんを襲う人が出て、食べ物を盗んで多くの人が警察に捕まったそうです。

また、最初に隠れていた防空壕は、爆弾が落とされていて、次の日に見に行ったら、隠れていた人はみんな死んでいたそうです。幸いおじいちゃんの家族は、橋の下に逃げて助かったけれど、そのまま防空壕にいたらと考えると死んでいたかもしれません。そうなると、今の自分もいないことになります。おじいちゃんは、トマトは食べられなかったけれど、命が助かったことにほっとしたそうです。トマトがおじいちゃんの身代わりになったかもしれないと思ったそうです。

僕たちが住んでいる沼津では、多くの人が亡くなっているという事実を、僕はよく知りませんでした。今回おじいちゃんの話を聞き、僕だけでなく、若者は知らなければいけないことだと思いました。

朝起き、当たり前においしいご飯を食べ、洗濯されたきれいな制服を着て、学校では友だちと楽しく授業を受け、笑って楽しく自由な生活を送れているけれど、一つの爆弾で全てが失われてしまいます。これは昔話だけの話ではなく、今現在この瞬間にも世界のどこかでは起きている現実があります。僕らの当たり前の生活をなんとなく過ごすのではなく真っ赤なトマトをおいしく食べられる幸せをもう一度考え直したいです。このことを友だちや将来の子供たちにも伝えていきたいと思います。

# 絶対に忘れてはならない

第三中学校　三年
山　本　真由香

今から七十六年前に第二次世界大戦が終結した。私は、最初戦争のことを何も知らなかった。歴史の授業で、第二次世界大戦のことを学んだ時、とても衝撃的だった。教科書で一九四五年八月六日の広島、一九四五年八月九日の長崎の原爆の写真を見た。私は、日本で本当にこのようなことがあったのかと目を疑った。それから私は、第二次世界大戦でどんなことがあったのか調べ始めた。

私は改めて自分が何も知らなかったと実感せざるを得なかった。私が調べて一番衝撃的だったのは、特攻隊という部隊だ。特攻隊とは第二次世界大戦で大日本帝国海軍によって編成された爆装航空機による体当たり攻撃部隊と直接掩護（えん）並びに戦果確認に任ずる隊で構成されている。私は、特攻隊の人たちの手紙を見て、本当にどれだけの思いでその航空機に乗ったのだろうと思った。特攻隊員の手紙には、「国のためではなく愛する者のため」というものがある。私は、「音速電撃隊」というアニメを見たとき、その中で「人の命を部品にしてもうたやからな」という言葉を聞き戦争がどれだけ人を苦しめたのか感じるところが大きかった。

もう一つ心に残った言葉は、「決死の覚悟で戦うのと必死はちゃいまっせ」という言葉だ。私は、その言葉の重みは、きっと私は、すべては理解できないだろう。私は八月九日に長崎の平和記念式典をテレビで見たとき、被爆者代表の岡信子さんの「平和への誓い」を聞いた。「私たち被爆者は命ある限り語り継ぎ、核兵器廃絶と平和を訴え続けていく」と述べた。私はその言葉を聞き、私たちは原爆を忘れてはいけないと改めて思った。

私が一つ疑問に思うことは、なぜ日本は核兵器禁止条約に入らないのかということだ。調べてみると、それには二つの理由があった。日本は、核廃絶を長期的な目標に据えているわけだが、直ちに法的な拘束力を持って、使用や保有を禁止するということになると、アメリカの核の傘の下にいる日本としては、この核の傘を万全にすることが難しくなるというのが一つ、もう一つは、法的拘束力を持って枠組みを作って核保有国の溝を深めてしまって、実質的な核軍縮の健全な対話が先に進まないという見方をしているからだ。これは、私の意見だが、

私は核兵器禁止条約には、入ってほしいと思った。人類史上初の都市に対する核攻撃を受けた日本だからこそ、核兵器の恐ろしさを知っている日本だからこそ入るべきだと思う。戦争を二度としないようにしたい。私は、戦争に私たちのような若い人たちが参加したことを知ったときに、今自分たちがこんなに平和に生きていけることに感謝した。自分たちが戦争に参加するなんて、とても想像ができなかった。でも戦争のときは、このようなことが当たり前だったという事実。私を含めて今の若い人たちは、戦争を忘れてはいけない。今この平和があるのは、命をはって大切な人を守った人がいるからということを絶対忘れてはいけないと思う。

終戦記念日、原爆の日は忘れてはだめだ。若い人たちの中には、歴史を覚えても意味がないという人たちもいると聞いたことがある。私は歴史を覚えることは大切だと思う。今、私たちが生きていけるのは、昔の人たちのお陰だと思う。そして、次の世代が新しい文化を創る。そういう積み重ねで今はあるんだと思う。大切な人たちをなくした人たちのことを、大切な人のために亡くなった人たちを絶対に忘れてはならない。戦争の恐ろしさを、絶対に忘れてはならない。

# 日頃の幸せに感謝を。

第五中学校　一年
渡邊　真奈

一九四五年、日本に二つの爆弾が落とされました。それは原子爆弾といい、日本が世界で初めて落とされた、ものすごい力を持つ爆弾です。その原爆によって数十万人もの人が亡くなりました。私は戦争について勉強はしたけれど私たちが考えなくてはならないことは知ることだけでなく平和について自分で考える事だと思うので、私はもう一度ふり返って「平和」について考えようと思いました。

まず、広島に落とされた原爆は「リトルボーイ」という爆弾で、八月六日、午前八時十五分に広島に投下され上空で爆発しました。爆風により、広島の町は一瞬で破壊され人々も爆風や熱線、放射線により二十万人以上の命がうばわれました。そんな原爆の悲惨さを人々へ伝え、二度と同じような悲劇が起こらないようにと戒めや願いを込めて、広島には「原爆ドーム」と呼ばれる建物が今でも文化遺産として残っています。原爆ドームは全壊しなかったので、当初原爆ドームは保存するか、壊すかで議論が起こりました。崩落の危険があったり、一部の広島市民からは、

「見るたびに原爆投下時の惨事を思い出すので、取り壊してほしい。」

という意見があったりもして一時は取り壊される可能性が高まってい

ましたが、保存を進める運動が始まり永久保存することに決まりました。原爆ドームには戦争を風化させない力があると思います。これから先も戦争のことを未来の世代に受けついでいってくれればいいと思いました。

一方、長崎に落とされた原爆は「ファットマン」という爆弾で、八月九日十一時二分に長崎市に投下され上空で爆発しました。熊本県や大分県からも

「ピカッと閃光が走り、空気が震え、キノコ雲があがるのが見えた。」

との証言がありました。ファットマンは、広島のリトルボーイの約一・五倍の威力でしたが周りが山で囲まれた特徴のある地形だったため、広島よりも被害は軽減されました。しかし、約十四万人以上もの命がうばわれることになりました。

長崎には、「平和祈念像」があります。柔和な顔は神の愛と仏の慈悲を、天に向けて垂直に高く掲げた右手は原爆の脅威を、水平に伸ばした左手は平和を、横にした右足は原爆投下直後の静けさを、立てた左足は救った命を表し、軽く閉じた目は戦争犠牲者の冥福を祈っているそうです。

そして、空襲も大きな被害が出ました。日本の軍事施設や工場だけでなく、東京や大阪などの住宅地も爆発されました。当時、木造建築が多かった日本では火災を起こす焼夷弾が使われ、焼け野原になってしまいました。東京大空襲では、約十万人もの命がうばわれました。また、沖縄では民間人を巻き込む激しい戦いにより、沖縄県の犠牲者は当時の人口の約四分の一に当たる約十二万人以上になりました。私よりも小さな子供たちが約一万人以上亡くなっていて、無差別に殺していくというのはとっても恐ろしい事だと思いました。

私は戦争について調べてみて、やっぱり戦争は恐ろしいから、もう二度とやってはならないと思いました。そして、世界中で核兵器を持たないようになればいいなと改めて思いました。私は他の国が核兵器を持っていて、お互いが信用できないから、戦争がなくならないと思うので、世界中が信用しあい、助け合えるような世界に少しずつでもなっていければいいと思います。そして、今はもう戦争から七十六年たっています。どんどん時間が進むにつれて人々が戦争のことを忘れて、再び戦争を起こしてしまったらと考えると不安が広がります。だから戦争の悲惨さと、もう二度と戦争をしないということを語りついでいくことが大切だと思いました。

そして、私が今たくさんの友達、家族に囲まれて笑顔で幸せに暮らせている日常に感謝をして生きていこうと思いました。戦争中に生活していた子供たちは親も近くにおらず、悲しく、さびしい生活をしていたと思うから、今の当たり前のようになっている暮らしに感謝の気持ちを忘れないようにしていきたいと思います。そして、この平和な日常がこれからも続いていくことを私は強く思っています。

# 曽祖父から繋がる命

第五中学校　二年
大月優佳

私達家族は曽祖父の足跡をたどるため、二〇一五年の夏休みにクルーズ船で金沢から舞鶴に入港し、舞鶴引揚記念館や復元桟橋を訪れました。

私の曽祖父は第二次世界大戦で満州方面に出兵し、途中で旧ソ連兵に捕らえられてシベリアで六年間抑留された後、船で舞鶴に到着したと祖母から聞いていたので、舞鶴には特別な思いがありました。曽祖父は私が生まれた六日後に九十三歳で亡くなったので、会ったことはありませんが、母から

「大おじいちゃんは、ゆうかちゃんが生まれたことを見届けて、安心して天国に行ったんだよ」

と聞いて育ちました。私は幼い頃から曽祖父は今の私達には想像できないほど壮絶な人生を歩んできたことを母から聞かされて育ちました。私の家には曽祖父が生前に綴った戦争手記のコピーがあります。

曽祖父は、シベリアで六年間もの抑留生活を強いられました。私が小学校生活で過ごすのと同じ期間を過ごし、しかもその大半を極寒の北の収容所で過ごしたなんて、どれほど辛かったのか想像もできません。曽祖父は体が細く体力がある方ではなかったため収容所で病気になり、途中からソ連軍の病院で過ごして激やせしたと聞きました。しかし、その痩せ方は栄養失調のような感じで、胴体が両手で丸を作った中に納まるほど細くなっていたそうです。なんとか命だけは助かり生きて帰ってくることができたのだそうです。極寒のシベリアで黒いパンをかじりながら、レンガ作りをさせられ、苦しい生活を強いられていたとも聞きました。

一方で曽祖父の手記には、ソ連兵に捕まる前の満州に入る直前、朝鮮で敵の戦車を見つけたのに攻撃をためらうと、相手も見て見ぬふりをしたのか攻撃せず、お互い静かにすれ違って戦闘を免れたことで戦死せずに生き延びることが出来たと書いてありました。これが曽祖父の人生を決める出来事であったのだなと思いました。

曽祖父は戦後、元軍人の学校の先生として物凄く怖い人だったとも聞いています。祖母を始め三人の子供に恵まれたのですが、曽祖母に度々きつく当たったり、祖母も子供の頃寝坊をすると曽祖父に水を頭から浴びせられてずぶぬれになり泣きながら学校に登校したこと、井戸に逆さまに吊り下げられたりと思い出すととても厳しくされて育ったと言っていました。私はこの話を聞いて、戦争に行った人は戦争での強烈なストレスで心をむしばまれてしまったり、苦しみが絶えない状況になってしまったりするのだなと思いました。家族や周りの人にも大きな影響があり、負の連鎖が続くような形で苦しんでしまうなと思いました。それでも、祖母はそんな曽祖父のことが大好きで、怒られた後に必ず謝ってくれたことや、お風呂屋に連れて行ってくれたこと、曽祖父の晩年に絵手紙を描いて送りあったりしたことも話してく

れました。祖母には辛い過去や現在があるのに、私にもとても優しく接してくれます。もしも曽祖父が戦争に出兵しなかったら、祖母も厳しいしつけを受けずにもっと穏やかな家庭でよりよい人生を送れたのではないかと思います。

この経験から、戦争は終わった後も想像した以上に多くの人を苦しめると思いました。私はもう二度と戦争をくり返さないようにするには、平和を築くことがとても大切だなと改めて感じました。そのためには、戦争について知らなければなりません。戦争の恐ろしさを後世に伝え続けないといけないと思います。しかし、私は今、普段の生活の中で戦争のことを知る機会がほとんどありません。その中でも家族の戦争体験の記憶を辿ったりすることで、私はこれからも戦争について考えていこうと思います。

# 戦争から目を背けてはいけない

第五中学校　三年
阿部倫明

このような話を聞いたことがある。

戦争は科学を発展させる。より多くの人を殺すため、科学技術は発展するのだ。

自分は信じられなかった。実験を行うために、わざわざ敵国の捕虜を使い、殺せた人が多いほど評価される世界で科学に進歩なんてありえない。しかし、実際に戦争によって新たな兵器ができ、科学は進歩した。

戦争は、一部の人の私利私欲のためだけに行われ、関係のない人が被害を受ける。科学者も評価されるために関係ない人を殺す。そして、それは兵隊に留まらず、民間人にも手を出すようになる。

一九四五年八月六日、広島に原子爆弾が落とされた。それによって地位が上がる科学者がいたのかもしれない。でも、被害を受けたのは、無関係な民間人。兵隊ですらない。地位を上げた科学者が死んでからもずっと原爆症で苦しんでいる人がいる。たった一握りの昇進と何十万という人の命が同等であるはずがない。

今日、平和のための科学の進歩が評価される。それが戦争中は人を殺すための科学が評価されていた。同じ科学でもまったく異なるものだ。なぜ、人を殺すことが目的の科学が評価されるのか。それは、戦争を起こした「偉い人達」が狂っていたからだ。

そもそも、戦争を起こした人、というのは人を殺してはいけない、というあたりまえのことがわからなくなってしまった狂った人だ。その中でも第二次世界大戦中は、人の命を命として誰も見ていなかった。アメリカでは、「真珠湾攻撃を忘れるな！」というスローガンをたて、国民の意識を上げた。日本で民間人にも攻撃をし始めても、真珠湾で奇襲したのだから、仕方がない、と自業自得のように言う。でも、真珠湾に民間人がどれほどいたのだろうか。卑怯な敵国の国民の命に価

値はなくなってしまうのか。どの国にいても、それぞれ生活し、生きているのに、人によって命の価値が変わってしまう。

ここまで、アメリカについてのことばかりだったが、じゃあ日本は何もしていない被害者なのか。いや、むしろ日本は加害者だ。戦争を始めたのは日本だし、被害が拡大したのも日本が早く降伏しなかったからだ。人の命は駒でしかなかった。軍の上層部の会話で、「〇人殺せばあの場所を占領できるだろう。」と言っていたという話を聞いたことがある。「〇人」とあるが、敵国の人を何人殺せばいい、という話ではない。自国の人が何人殺されれば、占領できるだろう、という意味だ。軍にとって、国民は人ではない。民間人の間では、反戦を訴える人を疎外し、みんなで戦争を応援した。

原爆だ、空襲だ、沖縄戦争だ、と言っても、だからといって、アメリカが悪く、日本が悪くない、わけではない。人から話を聞くと、まるで日本が悪くないように錯覚しそうになる。

今、戦争を正当化させようとしている人がいるように思う。一番最初に言った「戦争は科学を発展させる」という言葉はいい例だ。そんなものはただの言い訳だ。戦争が悲惨なものでないよう聞こえてくる。自分たちのしたことは間違っていない、と正当化しようとしているだけだ。そんな考えが広まったら、再び戦争が起きるだろう。

どんなに戦争を様々な面から見ようとしても、人を殺すことに変わりはない。つまり、戦争は悪いものだ。戦争を起こした日本は、正当化して逃げるのではなく、被害者のために祈り、平和を訴えていくべきだ。

# あのころの悲劇

片浜中学校　一年
藤原　楓

太平洋戦争末期の昭和二十年、広島市と長崎市に原子爆弾が投下されました。今から約七十六年前原子爆弾が投下され多くの人々が亡くなりました。今の私達はこのような悲劇を二度と起こさないように平和について考える必要があると思います。

今住んでいる日本では、戦争を行っていませんが世界中をみてみるとまだ戦争を行っている国もあります。日本は、終戦を迎えてから平和に意識が向くようになりました。あのころの悲劇、核兵器によって多くの人々が亡くなり、世界で核兵器禁止条約という国際条約がつくられました。けれども日本は、その条約に賛成していません。核兵器で日本は、唯一の被爆国です。沼津市でも、昔は沼津大空襲という第二次世界大戦末期、アメリカ軍による空襲がありました。そんな沼津市では核兵器廃絶平和都市宣言を行っています。真の平和を願い努力し続けることが大切だと思います。今、私の学校では、授業の一貫として平和学習というものを行っています。それは動画などをみて戦争のことを深く知り平和について考えるという学習です。私は今まで戦争のことを深く考えていませんでした。でも今年はじまった平和学習をしている時とても心が苦しくなりました。戦争の動画をみて多くの

国民が戦争に全面協力をしていておどろきました。私が思うのは、政府もそうだけど国民も人の命をうばう戦争に協力していたことが信じられないです。まだ外国では、戦争を行っている国もありまだ世界中が平和になるのには時間がかかると思います。でも少しずつでも世界中が平和に近づければ良いと思います。あの時代に生きていなくても聞けば分かる戦争の残酷さを、二度とくり返してはいけないこと、核兵器の怖さを知りました。世界中に戦争が無くなりどの国民もこの世界が安全で平和な世界だと思ってくれるように願いたいです。

今から約七十六年前の原爆投下で多くの人の命がうばわれました。広島には一九四五年八月六日午前八時十五分に世界ではじめて原子爆弾（リトルボーイ）をアメリカ軍が実戦使用しました。これは、人類史上初の都市に対する核攻撃でした。この核攻撃により十六万六千人が二〜四か月以内に亡くなりました。原子爆弾が投下されたキノコ雲は、とても大きかったそうです。広島に原爆が投下されて三日後の八月九日午前十一時二分に長崎に原子爆弾（ファットマン）をアメリカ軍が投下しました。この、原子爆弾が人類史上において二回目かつ実戦で使用された最後の核兵器です。約七万人の人が亡くなり、建物は約三十六％が全焼または全半壊しました。原爆が投下されてからも残っている建物で有名なのが原爆ドームです。爆風がほとんど上から真っ直ぐ下に働いて奇跡的に厚い側面の壁や鉄骨ドーム部分などは倒壊を免れたと言っても残ったのはすごいと思います。

私が、なぜこの作文を書こうと思ったのかと言うと学校の授業で平和学習がはじまり戦争についてよく知るようになったからです。小学六年生の時歴史で戦争を学んでから色々な戦争に関する映画や動画をみてきました。それはとても残酷で今の時代では考えられないことでした。あのころの悲劇をくり返さないように国民一人一人が平和について考えることが大切だと思いました。

# 戦争

金岡中学校　二年
大平彩愛

二〇二一年八月十五日。終戦から七十六年という年月が経ちました。テレビ、本、教科書に載っている自分達とは縁が無い戦争。しかし、今でも戦争につながってしまうような問題、内戦が世界のどこかで行われているかもしれません。ニュースでかつての被災者の親族の方達の声、思いはとても悲惨で辛いものでした。私の曽祖母やかつて向かいの家に住んでいたご近所さんは戦争の中生き抜いてきた人達です。しかも私が住んでいる地域は戦争と関わりがある地域だったと聞きました。

元々近所に住んでいたおじいさんは、私の住む地域にある「拓南訓練所」という場所の一員で、一年間民間人としてパラオ諸島の南洋地域で石油やゴムの開発や兵隊の仕事、食糧の保管をしていたようです。

戦争がだんだん悪化しつつあった時、島に戦車がやって来たことが

あったそうです。何人かで見に行った時、戦車が横スレスレで通りすぎて行ったりと驚くことがたくさんあったそうで、仕事だからとは言えど兵隊として外国まで行くのはさぞ不安だっただろうと心が痛くなりました。

もう一つは曽祖母から聞いた話ですが、曽祖父は特攻隊という飛行機に爆弾を積んでそのまま敵につっ込んでいくという隊の一員だったそうです。運よく一回目の出動時は飛行機が故障したため延期に、二回目の出動時前に戦争が終わり、運が良く生き残ることができたようです。今から五年ほど前、曽祖父が特攻隊の生き残った人々の一人としてテレビ番組に出演していました。そこで曽祖父は「逃れようがないんですよね」と一言だけボソッと言っていました。

その番組や多数のニュースを見て、実際に戦争を経験した大勢の人達の声や思いを聞いてみて、何よりも怖いという感情が私の中で強く感じました。もし明日、今すぐ戦争が始まってしまったら？他国をもまき込んでしまうような大きな戦争が始まってしまったら？家族、友人、ご近所さん、恩人全員世界のどこにもいなくなってしまったらと思うとぞっとします。戦争というのは勝っても負けても多くの人が亡くなって、それと同時に死を悲しみ、憎しみの繰り返しでメリットなんて改めて無いんだと分かりました。また、まだ戦争をしてはいけないことがまだよく分かっていない人達に戦争をすることの辛さ、悲しさを世に伝えていけたらと思いました。

# 食品ロスと平和

金岡中学校　三年
上野　凪槻

最近、ニュースでコンビニのお弁当やパンの大量廃棄をよく見る。捨てられるのになんでこんなにつくっているのだろうと私は思った。農家の人や、生産者が丹精込めてつくったのに、それが全てゼロになってしまうことに怒りと悲しい気持ちになった。

静岡市に住んでいる私の祖父は食べ物を捨てたり、残したりすることがとても嫌いだ。私が小さい頃、兄が食べ物の好き嫌いをしてとても怒られた。いつもはおだやかで優しい祖父が怒るのは珍しい。祖父は、戦争を経験している。私は戦争中に祖父がどんな食生活をしていたのか聞いてみた。

祖父によると、いなごやたにしをつかまえてきてつくだ煮にして食べていたらしい。芋や米は配給制で、一日一人一合の米をもらっていた。配給の米や芋だけでは足りず、闇米というものを買いに行っていたそうだ。それでも足りなくて、豆をふやかして米にまぜ、量を多くして食べていた。駿河湾が近くにあったので、いか、秋刀魚といったものが捕れ、それを食べてお腹を満たしていたらしい。調理するときに必要な火は、薪でおこして、かまどで米を炊いていた。味付けとして、砂糖は無く、しょうゆ、味噌、塩はあった。生きるために必要な

水は井戸もあったが、水道は出ていたそうだ。このことから、戦争中は必要なものを必要なだけ手に入れて生活していたことが分かった。

途中一年ほど疎開していた。富士の祖父の父の実家は、七・八軒の長家を持っている農家で梨やすいか、とうもろこしなどをお腹いっぱいに食べることができたそうだ。八月十五日に終戦をむかえた後、祖父は、静岡に帰ってきた。戦後は、戦争中より食糧事情がひどかったと言われた。働いてお金があれば、野菜を売っているところに行き、みかん、いか、秋刀魚、鮭、卵などを食べ、生き延びることができたそうだ。そのため祖父は小学校に通いながら働いていたらしい。

戦争中とは違ってお金があれば野菜も食べられているから、バランスが整ってきたけど、あふれるほどあったわけではない。田舎と都会、そして戦時中と戦後で、食糧事情に非常に差がでていることが分かった。

この話を聞いて私は、戦争中は食べ物を得るだけでも大変で、とにかく量を増やすために水で工夫していて、本当に米一粒でも豆一つでも大切にしていることを感じた。そして、祖父は戦争中、戦後の食糧難を経験しているからこそ、平和な今、お腹いっぱい食べられるだけでも幸せだと感じている。だから、好き嫌いをした兄を怒ったのだろう。

食品ロスは、今が平和で豊かだからある問題だと私は思う。祖父の話を聞いて平和であることは大切だということ、そして平和を維持していくために、今私がやれることは残さず食べ、できるだけ好き嫌いをなくす、余計なものは買わないことだと思う。お腹いっぱい食べることができるありがたさ。これは平和だから感じることができるのではないだろうか。

# 平和な世界へ

大岡中学校　二年
森岡綾音

八月九日。私はいつもと同じように家族とテレビを見ていた。東京オリンピックが開催され、日本中が盛り上がっている中、ある番組ではこんなニュースを取り上げていた。「長崎原爆投下から七十六年。」小学生の頃から戦争や原子爆弾のことを学んできたが、改めて戦争について考えるきっかけとなった。

七十六年前の今日。長崎市に原子爆弾が落とされた。当時の長崎市の人口約二十四万人に対して、死者は約七万三千人、負傷者は約七万四千人と多くの方が命を落とし、被害を受けた。原子爆弾から放出された三千度から四千度の熱線で長崎市内にあるおよそ四割の建物が壊れたり、焼けたりしたという。私の周りには、原爆を体験した人はおらず、インターネットやニュースの情報から当時の人々が感じた恐さを考えた。

私が見ていたニュースでは、長崎県で行われている「交流証言者」という取り組みについて取り上げられていた。この取り組みは、二〇一六年から行われており、被爆者と次世代の若者がペアとなり、語りつい

でいくというものだった。被爆者が実際に被爆した場所で当時感じた痛みや苦しさを若い世代に伝えていた。被爆者の平均年齢は今では八十三・九四歳となっており、被爆者がゼロとなり、実際に体験話をする人がいなくなる時代はもう遠くない。だからこそ、今の時代から若い人に伝えていく活動をしていることにとても感心した。ニュースや新聞記事を見ると、当時の苦しさを想像することはできるが、実際に被害を受けた人は、きっと私が想像しているより何百倍も何千倍もの苦しさがあるんだろうなと改めて感じた。

被爆者を自分におきかえてみると、さらに当時のつらさを感じる。当たり前のようにいつもと同じ生活をしていたとき、ほんの数秒でその時間が当たり前ではなくなる。とても貴重なものになる。学校で勉強したり、家族と話をしたり、そんな日常が特別になる。そんなことを考えた。もし自分だけが生き残り周りの知人が死んでしまったら私は残った人生をどう生きるだろう。何年経っても、何十年経っても大切な人を失ったという心の傷はずっと消えないだろう。そんなことを考えながら私はじっとテレビを見ていた。七十六年という長い月日が経ち、世間が新型コロナウイルスの感染拡大や東京オリンピックでのメダル獲得などでニュースの話題がいっぱいになっている今でも、当時のことをニュースとして取り上げることの意味があることを改めて感じた。

戦争を経験した日本だからこそ、核兵器や原爆の恐さやおそろしさを知っている。だからこそ私は、この日本の経験をもとに世界中に平和というものを伝えるべきだと思う。今この時間だって世界のどこかで戦争が起きているかもしれない。簡単に人の命を落とすことができるおそろしい武器を使って争い、憎み合い、傷つけ合っている。そんな世界が少しでも変われればいいなと考えた。自分には何ができるのか分からないし、もしかしたら、何もできないのかもしれないけれど、いつか同じ国の人同士で、違う国の人同士で、協力し合い、助け合いながら戦争というものが少しでも人々の生活から遠く離れたものになってほしいと感じた。

八月九日。この日は、改めて平和に対して考えさせられる日だと思う。朝起きて、学校に行って、勉強して、おいしいごはんを食べて、友達と遊んで。こんな日をくり返しているから、当たり前と感じる。でも、そんな毎日は、とてもすばらしいものだ。戦争を経験していない私たちのような子供、これからの日本の軸となる私たちのような子供は、たとえ昔のことでも、当時の被爆者の方々の思いをずっと伝え続けなければならない。いつか日本中、そして世界中の人々が平和で明るい日々を過ごせることを信じて。

# 平和への一歩

大岡中学校　三年
瀧本千尋

今年で第二次世界大戦が終戦して七十六年になる。私は今までの経

験から戦争をこの世界から無くすべきだと考える。理由は二つある。

一つ目は戦争は人の体や心を深く傷付けるからだ。私は以前、シリアで起こった戦争に巻きこまれ、視力を失った三歳の男の子について扱っている動画を見た。その男の子は家族とともにバスで戦火を逃れているとき、突然バスの窓ガラスが割れ、そのガラスが顔に刺さり、大怪我を負ったという。バスの窓ガラスは空爆によって割れたそうだ。私はこの動画を見たとき、男の子はもう二度とものが見えないのだという悲しさとともに実際に戦争による被害者を見て、戦争は何も罪のない子どもも傷付けるという恐ろしさを実感した。また私は小学生のとき、幼い頃に第二次世界大戦を経験した祖父に戦争中の生活について話を聞いたことがある。当時の祖父の生活は現代の私たちの生活と大きく違っていた。満足に食べられない食事、空襲への恐怖、自由に遊べない環境…。私たちの生活とはほど遠い制限が多い生活に驚いた。祖父はこの話をしているとき、笑顔は見せず、七十年以上前のことを鮮明に覚えていた。戦争は人々に辛い生活を送らせ、その記憶はずっと人々の心の中に残っていくのだと思う。七十年以上前、日本を含め世界中の人々を恐怖におとしいれ、たくさんの犠牲者を出し、心までも支配した戦争は今なお世界では続いていて、未来ある子どもたちの体や心を深く傷付けている。戦争をしても人を傷付けていくだけだと私は感じる。もっと多くの人々にこの意見を知ってもらいたい。そして人々の考えが変わり、新たな犠牲者をゼロにして悲しむ人を減らし、笑顔を増やしてほしいと心から願っている。

二つ目は戦争の他にも互いの対立を和らげる方法があるからだ。戦争はどんなものでも最初は意見や宗教などの考え方の食い違いから始まる。それは武力だけでしか解決することはできないのだろうか。きっと違うはずだ。お互いの意見や考え方を話し合って理解し、認め合い、お互いが納得することが重要だと考える。今年の夏、ここ日本でオリンピックが開催された。私は東京オリンピックを観戦して感じたことがある。それは違う国の選手どうしが協力し、認め合って競技をしていたことだ。共に戦った選手が抱き合い、握手して互いの健闘を尊重している場面を多く見た。オリンピックが平和の祭典と呼ばれる理由が東京オリンピックを見て分かった。信仰している宗教や国の違い、互いの国が対立していてもスポーツを通じて世界中が一つになっていた。互いを認め、尊重しあえる世界になれば戦争も必要なくなり、無くなっていくと思う。今この社会は多様性が大切な社会に変わってきている。オリンピックの精神を社会に応用させ、世界中が一つになり、戦争が不要だ、と言われる社会になってほしい。

これらの理由から、私は戦争に反対だ。戦争をなくすためにまだ中学生である私が直接関わることは難しい。しかし、将来の平和のために今世界で起きている戦争があることや日本にもあった戦争のことを知り、過去のことだと忘れずに罪無き人々が犠牲にならずにどのように平和な世界にしていくかを考えることは今からでも出来る。他にも戦争で困っている人々のために募金することも出来る。私たち中学生にでも戦争をなくすために出来ることはたくさんある。戦争をこの世界からなくし、平和な世界にするためには人々が互いを認め、一つになるべきだと思う。新たな戦争による犠牲者が出る前に、自分たちに

出来ることを探し、互いを尊重できる人になって平和への一歩を踏み出したい。

# 現実を受け入れる

大岡中学校　三年
西澤　凌介

今、テレビでは紛争のニュースがよく流れています。ところが多くの人々はニュースについて深くは考えようとせずに、聞き流す人がほとんどです。僕もその一人でした。平和な国である日本に住む人にとっては外国の紛争・戦争は他人事と考える人が多いのだと思います。遠く離れた国での紛争・戦争などは私たちには全く関係がないと思う人がほとんどなのだと思います。以前までは僕もそうでしたが、ある一つの紛争を知ったことでその考え方が大きく変わりました。

それを知るきっかけとなったのはユーチューブです。ユーチューブなどの情報産業はここ二十年でとても発展してきました。今では二十億人以上の人が利用しています。

話を戻しますが、ある紛争とはコンゴ紛争のことです。アフリカ大陸に位置するコンゴでは紛争が今でも起こっています。この紛争では多くの子供兵が使われています。これを知った時は心が痛みました。まだ可能性にあふれた未来があり、様々な夢や希望があり、これからいろいろな事を経験できるはずだった子供たちが兵士として利用されていると考えると、とても恐怖を感じると同時に紛争・戦争の恐ろしさを物語っていると強く感じました。人の命をここまで軽く見ることができてしまうのが紛争・戦争で、これこそが紛争・戦争を繰り返してはいけない理由だと思いました。

紛争の影響で武器を持った子供の写真や兵隊を組んでいる青年の写真を目にしました。武器を持った子の目を見ているとこちらまで悲しさが伝わってきます。そして、彼らの表情からは生きる希望が伝わってきません。恐らく紛争の恐ろしさを幼い頃から肌で感じてきた故の表情なのだと思います。彼らは一部の大人の都合のためだけに犠牲になっています。この事実を知った時には信じることができませんでしたし、信じたくもありませんでした。しかし写真を見ていると現実であることを実感させられました。

この紛争ではコンゴでとれる豊富な資源をめぐって争っています。この資源は外国に売れば大金が手に入ります。つまり、大人が子供兵を使う理由もこの大金のためなのです。この紛争は人間の底の無い欲望を表していると思います。自分が裕福になるためなら手段を選ばない。一見フィクションでしか聞かないような言葉に思えますが、これが実際に起きています。このような悲劇が情報産業が発展した時代から起きているのです。考えただけで怖いですし、それが起きないようにするためにも紛争・戦争は行うべきではないと感じました。

そして、この豊富な資源とは主にレアメタルのことを指します。レアメタルは主にスマホやパソコンなどの機器本体に使われます。発展

した情報産業を生かすには機器本体が必要です。つまり、発展国には全く関係ないと思われていたこの問題は他人事ではなかったのです。勿論、コンゴのレアメタルは全体の中の一部に過ぎませんが、今では二十億以上の人が間接的に関わっている可能性があるのです。今使っているスマホが紛争での子供たちの犠牲を経て完成しているのかもしれないと思うと言葉で表しきれないほど複雑な気持ちになります。

当たり前のように過ごしている中で一般の消費者である我々も間接的に紛争に加担している可能性があるのは恐怖でしかありません。しかし、この事実を知ることで「平和」に対する考え方が変わり、遠い外国の戦争・紛争でも間接的に関係あるのかもしれないと思うことはとても重要だと思います。他人事と考えなくなるだけでも「平和」に対する意識は大きく異なり、国単位の出来事ではなく、地球全体の出来事として広い視野を持って考えることができるようになってくると思います。そのためにまずは何事にも自分は関係ないという先入観をもたずに、いろいろな立場の人のことを考えて行動できるようになりたいです。

# 身近な平和

大岡中学校　三年
山下　空

昔、富山県の曽祖父母の家に遊びに行った時、仏壇に戦死した若い軍人さんの遺影が祀(まつ)られていたのをかすかに覚えています。

毎年八月十五日付近になるとテレビで終戦記念日の報道を目にします。太平洋戦争中、一定年齢に達した成年男子を国が強制的に兵隊にできる徴兵制の時代で、初めは二十から四十歳でしたが、戦争が長引くにつれて兵士が足りなくなり、十九から四十五歳まで広がったと記載されていました。若く一番大事な時期に家族と離れ死を覚悟し、国の為と命を捧げた軍人さん達は本当に立派だと思いました。

以前靖国神社へ行ったことがあります。靖国神社は戦争、内戦で戦死した英霊を祀るところです。その一角に遊就館という建物がありました。父が行こうと言うので何気なく立ち寄りました。その中では多くの若い遺影が祀られていて遺書や生々しい写真が数多くありました。普段は物凄く怖い父が涙をためて展示品を見ていたのがとても印象的でした。展示品の中にはゼロ式戦闘機や人間魚雷のレプリカがありました。特攻兵器です。自分と爆弾と共に相手に突撃する。なんて恐ろしい戦闘機なのだろうと思いました。生き残ってしまったら捕まえられ、捕虜とされ、何をされるか分からない。一層の事、突撃と共に死

んだ方がいいとも考えられます。こんな恐ろしい計画を考えたのはどんな思いだったのか。今の時代に生きる僕には、その状況を思い描くのはなかなか難しいです。

戦争は爆撃で命を奪われるだけではなく、飢餓との闘い、水も食料もない、マラリア等の病からも命を奪われていたそうです。あまりにも残酷な写真は現実に起きていたとは思えない程すごくて、全部は見られず退室してしまいました。

なぜ戦争が起きるのか調べてみました。そこには、多くは民族争い、宗教争い、資源争い、政治争い、領土争いの問題が組み合わされる為と記載されていました。戦争や紛争が起きると、その国の暮らす人達は住居を失い難民として移動し教育も受けられない人々が沢山いることを学びました。

僕は、めんどくさい、嫌だ、と思いながら当たり前のように毎日学校に通い、勉強して、時間になれば食事をし、水道をひねれば水も出て、電気も点く。しかしその反面、学校にも通えず、食事もまともにできず、親のいない子供が大勢いることを知りました。親は煩わしいとよく思いますが、いてくれることの幸せを感じないといけないと思いました。

今のようになんでも整っている時代に戦争が繰り返されたらと思うと背筋がゾッとします。戦後、七十六年経過した現在でも今だ苦しんでいる人達がいることをニュースで知りました。黒い雨を浴び、健康障害に苦しみながら被爆者と認めてもらえなかった八十四名。広島高裁判決で二審も原告勝訴、政府が広島県と市に上告要請したとニュースで見ました。被爆者と認められると、被爆健康手帳が交付され、医療や健康診断等で国から支援が受けられるようになるそうです。

戦争の事を調べれば調べる程、残酷で恐ろしく、僕にはこんな状況耐えられないと思いました。最近、暴力的なゲームが増えてきています。幼い子どもたちは影響を受けやすいため、大人たちは子どもたちと一緒に平和な未来について考える必要があると考えています。

# 特攻隊

愛鷹中学校　二年
藤井和夏

私は、この夏特攻隊のことを知りました。これほど、驚き、腹が立ち、胸が締め付けられたのは、初めてでした。

特攻隊とは、特別攻撃隊の略称で、爆弾を積んだ航空機などで自分の身体ごと敵地に突っ込む部隊です。その航空機には、着陸用の車輪がなく、燃料は片道分、帰還することは許されない設計になっていました。

特攻隊員は、男性で、ほとんどが十七歳から二十代前半の人でした。特攻隊に入り、特攻隊の基地に移ってきた人たちは、特攻隊の司令官から、味方の基地、陣地から出て敵を攻撃する出撃命令を受け、空に飛び立って行きます。十七歳はまだ高校二年生です。普段外を歩いて

いて、普通にすれ違うような、十七歳から二十代前半のまだ若い人たちが、昔は、自分が近いうちに死ぬことを覚悟して生きていたなんて、信じられますか。

でも、特攻隊の人たちは、自分が死ぬことを完全に覚悟していました。出撃命令が出るずっと前から、特攻隊に入ったときからずっと、覚悟をしていました。

自分が死ぬことを覚悟して生きていくことが、どんな気持ちか想像できますか。

この命を最大限に生かして、日本を、国民を救える、こんなにも栄誉なことがあるかと考えていたのです。さらに、自分の命を「国のため」に犠牲にすることを「誇らしい」とまで思っている人もいました。

でも、中には、特攻が嫌だけど、命令されたから行かなくてはいけない、という人もいました。

特攻したくない人たちの理由はいろいろありますが、その中には、やり残したことがある人や、故郷に許婚がいたという人も多くいます。中には逃げ出す人もいましたが、逃げ出さずに、家族、許婚への思いを持ちながら飛び立っていった人もいました。結婚して子供が生まれる少し前に徴兵され、子供に一度も会ったことがないまま飛び立った人もいました。

許婚を残したまま、また、自分の子供を一目見ることも叶わず飛び立っていった人たちは、どんな思いだったでしょうか。それに、特攻隊の婚約者の人たちもどんな思いだったでしょうか。私には分かりませんが、それは、とても辛く、苦しいものだったと思います。

生きることが、生きたいと思うことの何が駄目なのか、生きたい人を止める権利なんて誰にもないのに、命令され、飛び立っていった人たちに、私は、他の人によって自分の命を奪われたことの不条理さを感じました。

出撃命令が出たら、数日後に飛び立っていきます。「自分が何日後かに死ぬことが決まっている」なんて、とても異常だと思いませんか。もしも、今、目の前にいる人が、数日後にはもうこの世にいないことが決まっているなんて、あなたは信じられますか。私は、絶対に信じられません。でも、昔の日本は、そういう状態でした。

「同期の桜」という、日本の軍歌があります。太平洋戦争の時、好んで歌われていた歌です。歌詞は、簡単に言うと「死ぬのは覚悟の上だ、国のために美しく散ろう」という内容です。この歌は「戦争で死ぬことは美しいこと」と、日本人に思わせていたのです。

「悠久の大義」は、軍人が好んで使っていた言葉です。戦場に行き、国のために死ぬことを「大義」と言っていました。いくら、国のためでも、死ぬことのどこが「大義」なのか、私には理解できません。死んで国を守るくらいなら、生きて国を守る方が、何倍も何十倍もいいと思います。

戦争・特攻隊は、絶対にあってはならないものだと思います。戦争は、たくさんの尊い命が奪われることです。そんな戦争をこれから私たちが起こさないようにするために、戦争でたくさんの命が奪われたことの重大さを知り、全員で戦争について考え、理解を深めていくことこそが大切だと思います。

# 平和に向かって

愛鷹中学校　三年
瀬戸雅紀

今から七十六年前。一九四五年の八月十五日。長く続いた戦争が終わりました。空襲などにより、この戦争の犠牲は計り知れないものでした。しかし、日本はすぐに前を向き、復興、平和に向けて歩み始めました。そして、現在でも平和な国へ近づこうとしています。僕は、今の日本があるのは、このような悲惨な経験があったからだと思います。戦争の時代でなければ感じることのなかった、あの苦しさや辛さが平和な世界へと日本を導いているのです。

僕は、小学六年生のとき、戦争に対する考えが大きく変わりました。鹿児島県の知覧市を訪れたのです。知覧市は日本の最南端の特攻基地でした。そこにある知覧特攻平和会館には、特攻隊についての展示があったのです。

片道の戦闘機に乗って、敵の軍艦に突撃するのが特攻隊です。もちろん生きて帰ることはできません。特攻隊員は死ぬことを恐れず、戦争のために尽くしたのです。そこには、特攻に使われた戦闘機の模型や特攻隊員が書いた家族や恋人への手紙など、今では見ることのないようなものや内容がたくさんありました。僕はここで、戦争というものがただの争いではないことを知りました。また、戦争をテーマにした映画も見ました。当時の人々の貧しい生活、複雑な思いで戦場に旅立っていく若者の姿、跡形もなく街を焼いた空襲の悲惨さ。すべてがリアルに描かれ、胸が締め付けられるような思いでした。兵隊だけではなく、日本国民全員が自由を我慢し、戦争に協力しました。

当時はこのようなことは当たり前とされていました。しかし、当たり前にしてよかったのか、そのようなことがあってもよかったのか、という疑問が浮かびます。もちろん、よくなかったはずです。あってもいけません。そして、これから先にも無いようにする必要があるのだと感じることができました。

中学三年生になってから、戦争について学ぶことが多くなりました。社会の歴史の授業では、戦争の時代について勉強しました。当時の日本は、ヨーロッパの進んだ文化や政治に追いつこうと必死でした。そして、ヨーロッパが植民地支配を強めると、日本も植民地を獲得しようとしました。やがて、中国、東南アジアの国々と戦争を始めます。戦争に勝利すれば、そこで生活していた人々の意見には全く耳を傾けず、思いのままに占領し、自由に統治を始めるのです。戦況が悪くなれば、国民のことなど考えずに税金を上げ、たくさんの若者を兵隊として召集しました。残された人々は、厳しい労働条件の中で働かなければならなくなりました。そのため、戦争が終わるまで、みんなが苦痛に耐え、涙を何度もこらえました。どんな理由であっても、関係ない人まで争いに巻きこむのは絶対にやってはいけないことだと思いました。

また、英語の授業では、原爆の恐ろしさを若い人々へ伝えようとす

るピースボランティアの思いを学びました。原爆は、一瞬にして広島と長崎の街と人々を焼きました。それだけではなく、後遺症という形で今でも人を苦しめているのです。

平和とは何でしょうか。僕は、世界中のすべての人が安心して生活できることだと思います。戦争が終わってから何年もたった今、核兵器は未だにこの地球に存在し、争いは起こっています。この世界は本当に平和なのでしょうか。平和な世界を創るためには一人ひとりの意識が必要です。皆が自分の意見を伝え、相手の意見を尊重します。そして、戦争という悲劇を通して得た教訓を生かし、核兵器も争いもない世界を創り、未来へ伝えていくべきだと思います。そのためにも、まずは僕たち若者が戦争についてしっかりと学び、あの辛い出来事がよみがえらないよう、次の世代に伝承していきたいと思いました。

# 戦争を風化させないために

大平中学校　三年
大　村　寧　音

数年前、私は曾祖母の話を聞いて衝撃を受けました。その話は、次のようなものです。

曾祖母は父親が職業軍人だったため、終戦の頃を満州で過ごしました。終戦後、ソ連が攻めてきたので、最小限の荷物を持って満州を南下しました。逃げている間もソ連軍からの攻撃を受け、土手に伏せるなどして身を守りました。小さい弟を背負って一生懸命に逃げました。当時、満州では、働き手として日本人の子供を欲しがる人が多くいました。曾祖母の幼い弟や妹も声をかけられました。しかし、曾祖母の母親が「なんとしてでも子供全員を日本に連れて帰る」という強い意志を持ち、誘いを断り続けました。やっとの思いで帰国する船に乗ったものの、船内で伝染病が流行り何人もの人が亡くなりました。曾祖母は遺体を海から放り投げました。

曾祖母は、話しながら時折涙を流していました。その体験を聞いて、自分がその場にいるような気持ちになり鳥肌がたちました。また、話を聞いたことでより戦争に関心を持ちました。

戦後七十六年たった今、戦争体験者が高齢化していて戦争の話を聞ける機会が減っているということを聞きました。戦争を体験した人はきっと何億人もいるはずです。私の曾祖母はその中の一人にすぎないけれど、大変な世の中を必死に生きてきたことに間違いはないと思います。このような経験をなかったことにしないために、私たちは語りついでいく必要があると思います。

今の私にできる事は、戦争経験者の話を聞くこと、そして、身近にある戦争の爪痕について知ることだと思います。例えば、清水町に沼津海軍工作学校跡があります。ここでは航空機修理や機械化土木の教育、実習が行われ、全国から入隊者が集まったそうです。私たちの生活の中には、知らないだけで身近に戦争を物語るものがあります。遺構から学びその歴史を多くの人に伝えていきたいと思います。

さて、今年、社会の授業でアウシュヴィッツ収容所の映像を見ました。どんなことが行われたのか、話では聞いていましたが、当時のありのままの映像を見るのは初めてでした。臨場感があり、生きていた人々の息づかいが聞こえてくるようで、恐怖で胸がドキドキしました。

アウシュヴィッツ収容所のことを知らない人は少なくないと思います。授業の前は、私も名前を聞いたことがあるだけでした。原爆のように世界中でよく知られていることでなければ、同じ第二次世界大戦中に起きた事であっても、知らないことはあります。日本で暮らす私たちは、東京大空襲や沖縄戦、原爆についてはよく知っていますが、アウシュヴィッツのような遠く離れた場所での事件はそれほど知られていないのではないでしょうか。

戦争はどこの国でも起こしてはいけないものだと私は考えています。だからこそ、全世界の人がより広く戦争について知り、深く考えることが必要だと私は思います。

その一方で、私たちは、戦争を知らず平和であることが当たり前の時代に生まれました。日本人は平和ボケしているとも言われます。そのような私たちが、より広く戦争について知る上で、映像として残されているものは有効だと思います。最近では技術が進み、古い白黒の映像をカラー化することも簡単にできます。その当時の映像を見ることで、一人一人が感じとることが大切だと思います。

戦争の語り手が少なくなった今、誰かが繋いでいかないと、戦争の記憶が風化してしまいます。戦争体験者の話を直接聞ける最後の世代である私たちが、その話を多く聞いていきたいです。そして、私自身、曾祖父、母が繋いでくれた命であることを自覚して戦争の語り手の一人になっていきたいと思います。

# 今、私たちができること

長井崎小中一貫学校　九年
石倉　悠大

毎年行われる広島平和記念式典。この式典をテレビで見る度に思うのが、戦争を行う意味についてだ。終戦から七十六年が経過した今、そして戦争を実際に経験したことがある人がどんどん亡くなってしまっている今、次世代へと戦争を伝える、そして今より先の未来に戦争を起こさないために何ができるのか。自分なりに考えてみた。

まず一つ目は、映像や音声をしっかりと保存し、次世代へと繋いでいくということだ。この現代では、映像や音声をしっかり保存していくことができる。こういった情報を保存する技術が発達している今、こういった技術を生かしていくことが重要だと思う。

二つ目は、戦争を「他人事」ではなく、「自分事」にすることだ。戦争を体験したことがない自分たちのような世代では、どうしても戦争について他人事のように思ってしまう。その原因は、やはり日本という国は戦争がなく、誰もが安心して生活することができているからだろう。

では、海外ではどうだろうか。現在、世界百九十四カ国がある中で、二十四の国や地域で戦争や紛争が発生している。その国や地域では、若い人々が戦いに行かされているという現状がある。中には、まだ幼い子供たちに無理やり武器などを持たせて教育をしている国などもあるそうだ。そういうことがあってはいけないと思うし、自分たちもそういった現状をしっかりと把握する必要があるだろう。そういったことを考えていって、「他人事」を「自分事」にしていくべきなのではないか。

三つ目は、戦争が起きた場所に実際に足を踏み入れてみるということだ。日本には、原子爆弾を落とされた都市が二ケ所ある。それは、広島と長崎だ。そういった都市に実際に足を運んでみるということも大切だと思う。戦争によって原子爆弾が広島と長崎に落とされたということは誰もが知っているだろう。だが、そこで実際にどのような被害が起きたのかというのは、あまり知らない人もいるかもしれない。広島の原爆ドーム資料館などには、当時の状況を説明してくださる方々もいる。そのような方々に説明してもらうなどして、より戦争について知ることも大切だと思う。

四つ目は、政治に関心を持つことだ。現在、若者の政治への関心はどんどん下がっていっていると思う。選挙権が十八歳以上に引き下げられたのにもかかわらず、選挙へ行っている人々は中年世代の人々が多いとテレビを見ていて感じたことがあるからだ。

例えば、海外では学生が中心となってデモを起こすということも少なくないだろう。ところが、日本ではどうだろうか。自分たちも含め、言われたことや教えられたことだけで満足してしまっている人も多いだろう。しかし、それではいけないと思う。自分自身が、「受け」の姿勢になるのではなく、自ら学ぶ姿勢をもち、時には自分から発信できるくらいの「攻め」の気持ちを持つ必要があるはずだ。そういった自分の意見と合った主張をしている政治家の人々にしっかり投票できるように政治に関心を持つことが大切だろう。

この四つのことが、今私たちができることだと思う。自分たちだけではなく、次の世代へもしっかりと繋いでいくことによって、一人一人の意識を高めていくことができるはずだ。

一人一人の行動が、今後の未来を変えていくのだと思う。

# 世界平和の魁（さきがけ）に

長井崎小中一貫学校　九年
葛野　翔

一九四五年、八月六日、広島に原爆投下。八月九日、長崎に原爆投下。そして、八月十五日、終戦の日。八月になると、戦争や平和について多くの話題が取り上げられる。そしてその時は、平和について唯一考える時間だろう。

私は鹿児島県南端にある知覧特攻平和会館を訪れた。知覧という小さな町に、七十六年前、特別攻撃隊、いわゆる特攻隊の出撃基地、ま

た、飛行学校として築かれた。当時は、約六百名のパイロットが育成され、特攻基地として、沖縄戦に四百三十九名が知覧から出撃した。平和会館の中には、特攻作戦で戦死した数多くの隊員の遺品をていねいに保管してある。国のために命を落としていった若き兵隊たちが大切な人に残した遺書などもたくさんあった。その遺書には、大切な人との別れと共に、感謝、願望、自信、恐怖など、隊員の思いが込められている。最後に残せるものとして。

私が特攻兵に最も驚いたことは、その年齢の若さだ。自分と一つ、二つしか違わない当時の若者が戦闘機に乗り、海を渡り、敵国と戦いに行くということが考えられなかった。そして、必ず死ななければならないという壁に堂々と立ち向かう勇気が信じられなかった。戦闘機に通常付いている機関銃も外され、自分の命を守ることもできない。ただ付いているのは大きな爆弾一つだけ。そのため一方的に攻撃を受けながら、敵艦に体当たりするしかなかったのだ。それでも立ち向かうその強い意志は、計り知ることのできないほど大きなものだろう。だからと言って死に行くのが怖くないということではない。明日出撃を命じられたその一夜は、泣いて泣いて眠れない夜だったと聞いた。兵士の枕や毛布は涙で濡れていたと聞いた。死へと時間が迫るにつれ、その恐怖も大きくなっていっただろう。家族に会いたいと思っただろう。その願いも叶えることができない。死とともに消えてゆく。

出撃の朝は早かったという。太陽とともに空へ登っていった。別れの盃を交わし、友人との別れを惜しみながらも、笑顔で敬礼し、沖縄まで一直線に飛んでいったという。

今の平和な日本は、彼ら若き兵隊がいて、今の若き私たちがいる。その兵隊たちの涙が今の世界を作り上げている。だが、今も武器を用いて、争いをしている国がある。食べ物に飢え、腹をすかしている難民もいる。大東亜戦争から七十六年たった今も世界平和が実現されていない。私たち日本人は生活するのに難がなく、当たり前に幸せを感じ生活している。

その幸せは七十六年前の恐怖をみんなが知っているからだ。そんな日本が世界平和を訴える先頭になってほしい。だから戦争でのできごと、恐怖を伝えていかなくてはならない。戦争を体験した元軍人などの存命者が激減している。私たち若い世代が鍵となるだろう。しっかりとした戦争への知識をつけ、平和への考えを生存者の言葉と共に受け止め、またそれを後世へと伝えていかなければならない。それが今を生きる人の義務だろう。戦争を体験した人の記憶が、私たちの記憶となるように、七十六年前のできごとが色褪せないように学ばなければならない。人は他人を思い、日本は他国を思う。そのことが世界平和には大切なことだと思う。原爆を受けた唯一の国として、核の廃止と難民の支援など、命の不安なく暮らせるように日本が世界平和を訴える魁となってほしい。

# 戦争への思いと今の現状

長井崎小中一貫学校　九年
葛野　羚

「黙祷しよう。」
と私が兄弟に言う。そうするとこのような返事が返ってきた。
「嫌だ。」
私は思わず黙ってしまった。時間が経つにつれ戦争への思いというものが薄れてしまうというものが感じられた。そう戦争から七十六年が経っている。戦争への思いが薄れていってしまうのは当然かもしれない。でもそれは当然であってはいけないのだ。

私は、知覧特攻平和会館に行ったことがある。そこに行けば心が虚しい気持ちになってしまうところだった。

七十六年以上前の昔、鹿児島県の知覧というところに太平洋戦争の始まる前、陸軍の飛行場が完成し、そこが大刀洗陸軍飛行学校になった。自分の夢の実現のために困難なテストに挑み乗り越え、私たちと変わらない年齢の青年たちが国のために戦っていた。入学し、最初の頃は航空兵になるために教育や訓練を受けていたが、太平洋戦争が激化するにつれ授業内容は変わっていった。それは相手への艦船への体当たりを柱とする『特攻』である。私はとても苦しかっただろうと思う。特攻に行く日は言われておらず、その間訓練を受け、日々を過ごしていく。それはまるで死刑執行を待つ死刑囚のようにも思えてしまう。そう考えると本当に今の平和な生活にありがたみを感じてしまう。その学校に通う生徒は、三角兵舎というところで生活している。三角兵舎の中は、薄暗いランプに布団があるだけだ。その中で仲間と会話をし、夜明けを待つ。私はこのような生活をしていたら寝るのが恐怖でしかないと思う。その生活の中でその人たちは家族に遺書を書く。そして特攻の日をむかえると仲間に見送られていく。その飛行機の中では涙しか流せないだろう。もう家族、友達に会えないと思うと言葉に表せないくらい悲しいだろう。そのような思いをして国のために戦ってくれた人がいるのに、戦争に関心を持つこともせず、ただ美味しい物を食べ、勉強をして、ゲームをして生きていくのが情けなく感じてしまう。このように七十六年もたった今だからこそ、このような出来事を後世に伝えていかなければいけないのだと思う。戦争で被害を受けている人が生きているうちにすべてを残さなければ、今の戦争の話と百年後の戦争の話とは違っているかもしれない。

現社会は戦時中とは比べられないくらいに発展している。昔とは違い画像ではなく動画で残し、それを世界のどこまでも発信することができる。その技術を活用し、戦争での被害者の実体験を動画としても残し、発信すればよいと思う。そして私が一番大切だと思うのは一人一人がその戦争の悲惨さを学ぶことだ。そしてその戦時中の人々の気持ちを思い、考え、戦争の重大さを学ばなければいけないと思う。日本だけが戦争のことを思うだけではこれからの世界の社会にもあまり意味が無い。アメリカやヨーロッパなどでも戦争についての学習を取

り上げればこれからの社会には戦争は少なくなるか、あるいはなくなるかもしれない。そうすれば、多くの人が今のあたり前の生活にありがたみを感じることができ、人を思いやる気持ちが一つでも増えるのではないかと思う。私たちは特攻隊で亡くなってしまった人も含め、戦死してしまった人の命を無駄にしてはならない。決して命を無駄にしてはならない。

# 戦争について思うこと

原中学校　一年
佐藤　美咲

夏休み、母と一緒にスーパーに買い物に行った。お菓子コーナーで「サクマドロップス」に目がとまり、私は小学一年生の時にテレビで「火垂るの墓」を見たのを思い出した。そのテレビを見た時初めて戦争の恐ろしさ、悲惨さを感じ、号泣して涙が止まらなかったのを覚えている。

また、家族で沖縄旅行に行った時に立ち寄った「ひめゆりの塔」で戦争を体験した方の貴重な話を直接聞き、戦争は恐ろしい。二度としてはならない。命の尊さについて更に強く思うことができた。私は、本当の戦争の怖さを知らない。

今、私たちは、当たり前に毎日ご飯が食べられる。当たり前に洋服を着て出かけることもできる。当たり前に家族や友達と笑い合い語り合うこともできる。そんな「当たり前」のことが何一つ許されなかったのが戦争である。私は毎日の当たり前の日々の中で、何不自由なく生活を送っている。

そんな幸せな毎日を送っていると、七十年以上前、命がけで戦っていた人たちがいたことが、なんだか信じられなくなる。今、日本には戦争を体験した人が少なくなっている。そのため、体験談や戦争がどんなものだったのか、耳にすることも少なくなった。だから私も、戦争がどんなに辛いことだったのか、二度とやりたくないと思うほどだったのか、あまり理解していなかった。

でも、小学生のとき国語の時間に戦争のことを考える授業があった。学校の図書館で、戦争の恐ろしい写真や、思わず引いてしまうような悲惨な写真を目にし、戦争の恐ろしさを学んだ。本や写真からは、戦争が、どれほど恐ろしい体験だったのか、伝わってきた。

戦争を知らない私たちにできること、それは、「当たり前の毎日」に感謝することだ。私たちの今後の課題は、戦争の悲惨さ、戦争の本当の恐ろしさ、命の尊さ。そして、戦争を体験した方たちの平和を願う思いを、正しく語り継ぐことである。

そのためには、一つでも多くのことを学び、感じ、考えて未来へつなぐ。これが、これからの未来の平和をつくっていくものだ。平和とは願うものではなく、私たち一人一人が日々守り育てていくもの。この気持ちを大切に未来に思いをつなげていきたい。これが、私たち戦争を知らない者の、大きな責任だと思う。

戦争で亡くなられた方々の命はもう取り戻せないし、戦争に苦しめられた人々の時間も、もう返ってこない。戦争という歴史を無駄にしないためにも、戦争のない今を生きる私たちが、人の命も自らの命も、大切にできる世の中になることをこれからも忘れてはならない。

# レターラック
## ～曽祖父の残したもの～

原中学校　一年
篠原　壮輔

ぼくの祖父の部屋には、しぶい色をした木製のレターラックがあります。頑丈な作りをしていますが、だいぶ年季の入った物です。

夏休みも半ばにさしかかったある日、そのレターラックについて祖父に尋ねてみました。いつごろからある物なのか気になったのです。すると祖父が、手先の器用だった曽祖父の手作りであることを教えてくれました。祖父は一枚の写真を取り出してきました。その白黒の古い写真には、初めて見る曽祖父の姿がありました。

朝鮮半島が日本領であった戦時中、曽祖父は鉄道員として朝鮮半島に勤務していました。現在の北朝鮮の元山（ウォンサン）という所に曽祖母と住んでいたそうです。そのころは、日本人もたくさん住んでいて、元山に住む現地の人とも仲良く暮らしていました。しかし、日本の敗戦が濃厚になりつつあると、元山の現地の人々の態度も変わり、肩身の狭い思いをしたそうです。

そんな中、日ソで結んだ不可侵条約を破棄したソ連が、満州や曽祖父の住んでいる北朝鮮に攻め込んできました。

その一報を聞いた曽祖父母は、着のみ着のまま列車に乗ってにげたそうです。それが最終の列車で、一本遅れたら乗ることができませんでした。女性は暴行される危険があり、みんな頭を丸刈りにして男性のふりをしてにげました。にげることができなかったものは、ソ連軍の捕りょとなり、シベリアで強制労働をさせられたりして、たくさんの日本人が命を落としました。

運良く列車に乗ることができた曽祖父母は、釜山（プサン）まで列車で向かい、その後船に乗り、曽祖父の実家がある山口県に帰ってくることができたそうです。

ぼくは祖父からこの話を聞くまで、曽祖父母のことをよく知らなかったし、戦争について深く考えることもしませんでした。自分は戦争からかけはなれた世界にいる気がしていたからです。

しかし戦争で、罪のない市民や子供たちが犠牲となったニュースを目にしたりすると、世界のどこかでこの瞬間にも、戦争が続いているのだと気付きました。

戦争のない世の中になることは理想です。ただゼロにするということは難しいのが現状です。そんな中ぼくら若い世代にできることは、戦争について知ること、関心をもつことなのかも知れません。

ぼくは祖父から受けついだこの話をずっと忘れず、後世に引きつい

でいきたいと思いました。そして戦争のない世の中に一歩でも近づける希望を持ちつづけていきたいです。

# 戦争を知る、考える

浮島中学校　一年
久保田　葵

私が「平和」について考えるきっかけとなったことは、曽祖父母の戦争体験を母が話してくれたことです。曽祖母は空襲から逃れるために、広島へ疎開をしたところ、原爆の影響で降っていた黒い雨にあたってしまいました。曽祖父は、戦争の前線で長い間戦っていました。でもそのことは、あまり思い出したくなさそうだったと、母は言っていました。私はこの話を聞いて、とてもおどろきました。会ったことはなかったけれど、自分の家族がこんなに大変な思いをした戦争を、私はよく知らない。それはとても悲しいことのような気がしたからです。そこで私は戦争を知るために、沼津市立図書館で行われていたパネル展を見に行くことにしました。

パネル展には戦争中の街の様子を写した写真や、原子爆弾のしくみを解説したパネルなどが展示されていました。その中で最も衝撃を受けたのは、線路の上に倒れていた、真っ黒こげになった母親と子供の写真です。母親の体には誰かがかけたのか、かけぶとんがかけられていました。原爆のむごたらしさを物語っているその写真は、おもわず目をそむけたくなるようなものでした。でもあえてそのような写真を展示することで、戦争の残酷さを伝えたかったのだと思います。そう考えると今の日本は、新型コロナウイルスが蔓延（まん）し、たくさんの人がつらい思いをしているけれど、戦争によって多くの人が亡くなったりすることは決してないので、とても平和な世の中になったのだと思います。しかも七月下旬から平和の象徴であるオリンピック・パラリンピックが東京で開催されています。

しかし日本から視野を広げ、海外を見てみるとどうでしょう。今でも戦争が起こっている国、原爆のもととなる核を所有、製造している国はまだたくさんあります。最近よく耳にするのは中東の国、アフガニスタンの戦争です。アフガニスタンの軍と武装勢力タリバンが衝突し、タリバンによって国が大きく変わってしまいました。タリバンの支配下では女性の権利が認められなかったり、住民がパニックを起こしてしまったり、何の罪もない一般市民が亡くなったり。そのようなことがくり返し起きてしまわないかとても心配です。このような情報が、平和の象徴であるオリンピック・パラリンピックの話題と一緒に報道されているところを見ると、世界中が平和になっているとは言えないと思います。だから、このままではいけないはずです。私が戦争を直接とめることはできません。でも戦争について調べたり、考え、人に伝える、うったえることはできます。その考えの輪が広がってゆけば、戦争をとめる、なくすことの一歩につながっていくはずです。

終戦から七十六年。戦争を体験した人々の高齢化が進み、戦争を知

らない世代の人が増えています。日本で本当に起きた戦争の記憶を、体験した人から受け継ぐ時間は、あまり残されていないのかもしれません。でもこの記憶は絶対に風化させてはいけません。だから、自分にできることから少しずつしていきたいです。

# 「知る」という大切さ

浮島中学校　一年
三　輪　虹々彩

私の日常は家族と一緒に暮らし、朝昼夜のご飯を食べ、学校で勉強をしたり友達と楽しく話したりという普通の毎日です。私にとっての普通の毎日が約七十六年前の人達にとっては、すごく平和なことなのだと原爆や戦争のことを調べてそう感じました。

「原子爆弾」は第二次世界大戦でアメリカ軍によって広島、長崎に落とされました。原爆を落とされた唯一の国、日本。世界にはたくさんの国があるけれど原爆を落とされた国は日本だけです。一瞬にして多くの人の命が奪われ広島、長崎は吹き飛んだという。その写真や資料はとても衝撃的でした。直視できない写真もありました。とても悲しい気持ちになりました。戦争当時の日本国民は日常生活をいろいろと制限されていたと知りました。そして大事な家族が戦地に行き日本のために他国と戦う。戦争によって命を落とした人が大勢いたことを思うと家族が一緒の普通の日常は当たり前ではなく、とても幸せなことなのだと感じました。

戦争では自国も相手国も多くの命が奪われてしまう。自国も相手国も自分の国のために命をかけて戦い、大切な人にまた会えるように必死に生き延びるために戦ったと知りました。それを知り胸が熱くなりました。しかしその反面、人間同士でなぜこんなことができるのだろうという疑問も浮かびました。多くの命が奪われる戦争、今現在も戦争が起こっている国があります。テロが起きることもあります。政治や宗教の違い、報復攻撃の連鎖で戦争が繰り返される世界は怖いです。もしまた日本が他国に攻撃されたり爆弾が飛び交い住んでいる街が写真や資料でみたような火の海になったりしたらと考えるととても怖いです。現実味がないことかもしれないけれど、それでも私は恐怖を感じてしまいます。戦争のない世界、平和な世界、核兵器のない平和を願いたいです。平和実現のために必要なことは何かを私なりに考えてみました。お互いの理解ではないか？理解するためには話すこと、対話が大事だと思います。対話をし関係性を深めることでお互いの理解につながり、それが戦争回避のきっかけ、世界平和に近づくきっかけのひとつになるのではないか、なればいいなと願います。

戦争や原爆について昔話のような感覚でいた私が改めて写真や資料で知ったことは残酷な光景や残酷な事実もありました。目を背けたいものもあったし怖いと感じたことがたくさんありましたが戦争犠牲者や被爆者が伝えたいと思っていることを知ることの大事さを感じています。衝撃的な部分も含め知る、知ろうという気持ちを持ちたいと思

います。知る機会を作り知ることが戦争、原爆を体験していない私達にとって必要なことだと思います。知るということも私達でもできる平和につながる一歩だと思うので、これからも戦争について、日本に落ちた原爆について目を背けず知っていこうと思います。

# 伝えていくべきこと

浮島中学校　二年
小森　悠

八月六日八時十五分、テレビで映し出された広島平和記念式典での平和の鐘とともに、黙とうをささげました。原爆ドームや慰霊碑が映され、首相や広島市長が「原爆投下から七十六年、後遺症により今なお苦しんでいる人達が大勢いる。こんな思いを他の誰にもさせてはならない。」と、核兵器廃絶を訴えました。

広島原爆について、ぼくは初めて原爆小頭症と呼ばれる被爆者の方がいることを知りました。原爆小頭症とは、妊娠初期の母親のおなかの中にいる胎児が、大量の放射線を浴びたことで、知能や身体に障害がある状態で生まれてくることです。標準の頭囲よりも二倍以上小さく、病気にかかりやすいため、当時は二十歳まで生きられないとまで言われたそうです。自分の子供が原爆小頭症と診断された母親は、周囲にはもちろん子供にもかくし続けたと涙まじりに話していました。それは原爆小頭症について、知りもしない人が偏見や差別をする状況があったからです。原爆小頭症は遺伝しません。うつることもありません。きちんと理解していれば、周りの人達も顔をそむけることをしなくなると思います。原爆小頭症の方は、生まれた時から「被爆」だけでなく「差別・偏見」という他の苦しみもかかえてきました。ひどい言葉をあびせられたり、仕事をくびになってしまったりしたこともあったそうです。たった一瞬の被爆がこんなにも長く人を苦しめることに、ぼくは恐怖を感じました。自分の一生が原爆によって失われることがどれほど辛いことか、なぜ二重、三重に苦しまなければならないのか、偏見や差別をもっている人はしっかりと考えてほしいと思います。

ぼくも原爆について知るまでは、少なからず偏見をもっていました。自分には関係ない、生まれる前に起きたことだ、もう平和な日常だからいいじゃないか。そんな気持ちでした。しかし被爆の方にとっては決して平和ではない、見えない苦しみが今も続いていることを知り、そんな風に思っていた自分が恥ずかしくなりました。ぼくは一度も広島の原爆ドームへ行ったことはありません。被爆された方から直接話を聞いたこともありません。でも原爆がどれほどおそろしい物だったのか知ることはできました。

原爆投下から五百ｍの場所で被爆した広島二中の一年生は、全身に火傷をおい、目も見えなくなっていた生徒もいました。それでもせまりくる火の手から逃れ、川の中に飛びこみ必死に泳ぎました。水を飲まず何㎞も離れた家に歩いて帰った生徒もいました。全員が生きよう

と、懸命に戦っていたのです。この中学生の生きようとした思い、核兵器がなければ生きることができた命、苦しむことのない人達がいたことを多くの人が知ってほしいと思います。「知る」ことで「伝えていく」ことができます。忘れないことはもちろん、知らずにいる人達にも正しく伝えていく必要があります。

今年一月二十二日に核兵器の保有や使用を全面的に禁止する「核兵器禁止条約」が発効されました。しかし、唯一の被爆国である日本が自国の安全を保証するためと、この条約に署名していません。核兵器はなぜなくすことができないのか。日本が核兵器をもたなくなることが本当に危険なのだろうか。問題解決にこんなにも時間がかかっていることにもどかしさを感じます。時間がたつにつれ、核兵器のおそろしさが人々の記憶からうすれていってしまうのではないのかと不安になりました。大切なのは一人一人が平和を願う気持ちを持ち、伝えていくことです。それが核兵器のない世界の実現につながることを強く願います。

# 平和な世界

今沢中学校　二年
柳沼　佑李彩

私達が今平和に生きていることは何にも変えられないほどの凄いことなのだ。私自身が思う平和は、人々がみんな大事な家族を持ち笑顔であふれ不安なく暮らせることだと思う。

私は、「戦争」という、たった二文字の言葉を聞くだけで背筋が凍る。戦争は儚(はかな)く切ないものだ。国のために命がけに戦った兵士、殺され亡くなった人、恐怖に襲われながらも生き抜いた人、決して全ての人々の命が無駄ではない。私には輝いても見えるし、尊敬もできる。だが、戦争は絶対に起きてはいけないことだ。赤紙（召集令状）が届けられ戦争に行った兵士を家族は帰ってくる保証もないままひたすら待ち続けるだけだった。ある人は言う

「日本は勝つ、だから必ず帰ってくるばかりだと思っていた。」

実際はそんな簡単なことではなかった。悲しむことは許されない、戦死を伝える一通の死亡告知書が届き、その死を受け入れるしかなかったそうだ。「行ってきます」の一言で大切な人の顔が見られなくなるのは、心に穴が空くほどの苦しさだと思う。

日本には広島と長崎に原爆が落とされた。初めて戦争において攻撃用に実使用された核兵器であり、通常兵器と比較して威力が極めて大きいため条約などにより禁止されているほどだ。たった一発落ちただけで何十万人もの命が奪われた。爆発の瞬間に強烈な放射能が発生し周囲の空気がすさまじい勢いで膨張し爆発が起きた。原爆投下から二～三十分後、広島の広い地域で黒い雨が降ったそうだ。人々は黒いにわか雨に打たれていた。それが核兵器がもたらす放射性降下物つまり、放射能の雨であることを人々は知らなかった。原爆により被害を受けた人々は七十六年たった今でも、心に消えない傷を負い、これから先

もずっと忘れられないことだろう。それは、これから先も同じ目にはあってはいけないことだ。そのために「戦争をしない」という憲法がある。この憲法が世界中に広まっていったら、世界中のどこでも他国との争いで傷つき悲しむことがなくなるだろう。

戦争は本当に必要だっただろうか。私は、戦争をする理由を考えた。戦争は他国との間で生じる利害の不一致や意見の相違によって起こる対立を、暴力で解決させようという互いの行き違いによって生まれる。どのような場面で戦争をするまでになるのか。例えば、争いなどで一番に上がるのは食糧等による土地の奪い合いによるものだ。それは、生きていくために大切だからこその生存のための争いだった。他には他国に対しての不満や国家への侵略などが関係しているようだ。戦争が起こる理由をいろいろと考えてみたものの争いをし互いに傷つけあうまでの理由はない。人々が争う理由は決まっていて、その理由をどのように回避するか、国家、そして国民が意識していくことが大事だ。そして、これから先も平和のバトンをつないでいかなければならない。もしも、日本で戦争が起こるとなったらどのような状況なのか。戦争というのは国家が動くだけでは収まらないほどの大きな被害をもたらすのにも関わらず、策を講じて得ようとしているものは何なのか。刻まれるように変わる中、将来のリスクにどうやって備えるか。

「何故か戦争に巻き込まれた」

だけでは済まされない。少しずつ、少しずつでも、戦争について関心を持ち、今、自分には何ができるのかしっかり考えていきたい。

# 私に出来ること

今沢中学校　三年

市川美楓

「平和」と聞いて何を思い浮かべるだろうか。第二次世界大戦終戦、原爆投下から七十六年もの月日がたった。七十六年前というと私もお母さんもまだ生まれていない。祖母ですら戦後に生まれたので、私達家族に戦時のことを直接知る人は誰もいない。

私は小さい頃から戦争の話を聞く機会に恵まれていた。話してくださる方々は、時に涙を流しながら思い出したくないであろうことを私達に伝えるため話してくださった。私は聞く度、聞く度、心を痛めた。だが、今になって思うことがある。確かに話を聞くと戦争はもう二度と起こしてはいけないことだと思わされるが、それは思っているだけであって私は平和について何か携わったことがあるのだろうか。誰しもが戦争はだめだと、平和が一番だという。しかし、平和のために何か行動を起こしている人は極わずかしかいないように思える。口にするだけで何もしない人が大半なのだ。そして、私もその中の一人である。

辞書で平和をひくと、戦争がなく世の中が穏やかなさまと書いてある。やはり、これを見るようにこの世の中は戦争が悪であり、戦争がないことが正義のようにみえてくる。でも、本当にそうなのだろうか。当時の人々からしたら戦争をすることがまた別の正義だったのかもし

れない。正義は一つではない。私はそう思う。

少し戦争から離れ現代のことで考えてみた。例えば世界で貧困に苦しんでいる人、約七億三千六百万人。人身取引の被害にあっている人々、約二千百万人。学校に通うことのできない子供たち、約二億六千四百万人。これを聞いて何を思うだろうか。確かにもう戦争を起こさせないこと、忘れないことも大切だ。だが、それと同じくらいこのように私たちの当たり前の生活を実現できていない人々に目を向けることも大切なのではないだろうか。この多くの人々を救うのにあとどれくらいの月日が必要なのか私には全く分からない。この先何年も何百年も救えないかもしれない。そして私の残りの人生で直接的に何かすることはできないかもしれない。私たち中学生にできることなんてほんの小さなことしかないかもしれない。だから、その小さなことを積み重ねることが大切なのではないか。

私が「平和」について考えるとき、多くの平和が存在するのだと思った。戦争のない平和。貧困のない平和。当たり前であり当たり前ではない平和。ある星のある島のある中学三年生の私にできることは極わずかかもしれない。だけれど私に出来ることを考え、自分と自分の周りの大切な仲間たちだけでも守ることを行っていきたい。違う国まで救えないかもしれない。しかし、まずは自分の周りを支える、守るといった小さなことから始めていきたいと思う。数多くの平和が実現する日は私の目では見れないかもしれない。しかし、いつかその日が来るときのため自分の周りの小さな幸せを重ねることからやっていこうと思う。これが私の思う平和だ。

# 他者を尊重する世界

今沢中学校　三年
田村菜月

今日、令和三年八月十五日を迎えた。日本は戦後七十六年となる。テレビでは終戦記念の番組を特集している。しかし今まで戦争というものをあまり身近に感じたことは無く、ただ漠然とした恐怖感があった。広島、長崎の原爆、東京大空襲、沖縄戦。どれも残酷な出来事で想像を絶する恐ろしさだった。自分の住む沼津はどうだったのだろう。

沼津市の資料によると、昭和二十年七月十七日に沼津大空襲というものがあったそうだ。米軍機百三十機が沼津を襲い、九千七十七発の焼夷弾を投下した。これにより沼津市は、九千五百二十三戸を焼失、二百七十四人の死者を出したという。この空襲により都市面積の八十九・五％を破壊されたとされる。

また、今日九十二歳になる方が経験した話を聞いた。太平洋戦争中、沼津の町に油脂焼夷弾が降り注ぎ一面が焼け野原となった。油脂焼夷弾とはゼリー状の油が建物の屋根や壁にこびりつき、水をかけてもなかなか消えないという性質を持つ爆弾である。そのため沼津はほとんどの家が焼き払われ、沼津駅の辺りから海を見ることができたのだという。海岸までの土地にある建物が無くなってしまったからだ。

今私達が住む沼津には大きい建物があり、たくさんの家があり、学

校や商店などがある。当然多くの人が生活している。そこに爆弾が落とされ九割の建物が焼失してしまったらどうなってしまうだろうか。まず自分の家が無くなるかもしれない。そうなれば服も無くなり、ふとんも無くなる。生活をするための物や場所が無くなってしまうのだ。また、食べ物を手に入れようと思っても店が無ければどうしようもない。食べ物だけではなく、生きるために必要なものも手に入れることができないだろう。学校に行くことができるかどうかも分からない。建物だけではなく人にも影響があるだろう。怪我をして自由に身動きできないかもしれない。自分が無事だったとしても家族や友人が被害にあっている可能性も考えられる。私には両親と兄がいて昼間はそれぞれ仕事や学校へ出かけている。もし離れた場所にいるときに空襲があったらどうなるだろう。道路や線路が燃えてしまえば移動することは非常に困難だ。当時は車も少なかったから歩くしかない。携帯電話もなく、連絡をとることすら大変だったはずだ。家族と離れ離れとなり安否も分からず、自分が安全かどうかも分からない。そんな状況になったとき、はたして自分は冷静に行動できるだろうか。多分恐ろしさと絶望感で泣いてしまうだろう。

自分の住む町で実際にあった被害について調べたことで、今までより戦争というものを現実的に、また身近に感じることができた。私達は、今くつろげる家があり、学校にも通うことができ、自由に暮らすことができる。おいしい食べ物もたくさんあり、恵まれた時代に生きている。この生活がとても幸せで大切だということを、改めて感じることができた。二度と恐ろしい戦争を起こさないでほしいと強く思った。

戦争が起こる原因は何なのだろうか。国の違い、人種、民族、考え方、宗教の違い。そういうものから対立が生まれ争いが起こるのだと思う。だからといって違いを無くすことはできない。それに、もしみんな同じになったらつまらないとも思う。それぞれの個性を認め、互いを受け入れることが大切なのではないだろうか。私達が子供の頃よく言われた言葉がある。「自分がされて嫌なことは、他の人にもしてはいけない」。もし世界中の人がこう考え行動したら、今より他者を尊重する世界になるのではないだろうか。世界中から争いが無くなることを心から願っている。

# 平和の輪

門池中学校　一年
鈴木心春

二人の児童が、緊張した面持ちで平和についてスピーチしている。今日は八月六日、七十六年前の今日、広島に原爆が落とされた。私は原爆という名前は知っていた。けれど深く調べたことはないので、良い機会だと思ってインターネットや本で調査してみた。

まず、インターネットで「広島の原爆」と検索した。

見ていられなかった。焼け焦げ、血だらけの人たちがうつろな目で

横たわっているのだ。私は、原爆の作製に関わった人全員が憎らしかった。悲惨な姿になった、国は違えど同じ人間を見て、勝利の声をあげている——。

また、それと同時に自分に対する怒りも込み上げてきた。私は小学校四年生まで黙祷さえしてこなかったのだ。

なぜ戦争をするのか。私は納得する答えを導きだせない。不満があるなら、口にだせばいいのに。話し合いで解決すればいいのに。それとも、言葉では不十分なのか。だからといって、武器にすがるのか。そして邪魔な者を殺すのか。

私は、絶対にそういう考えにはならない。きっと、多くの人が同じ意見だろう。

しかし、そうならないからといって過去の人類のあやまちに背を向けるのは罪だ。ご先祖様の行動から、何かを学び取らなければ。進歩していかなければ。そうしたら、戦争も二度と起きない平和な世の中を創れるはずだ。

次に、原爆に関する数冊の本を読んだ。これらの本に胸がしめつけられるような被爆者の言葉があった。

——私だけ生き残ってしまってごめんね。

そう、原爆は肉体的な苦痛だけでなく、精神的な苦しみをも与えるのだ。もしかすると、その傷は武器によっての傷よりも、もっとずっと深くつき刺さり、決して癒えない、一生残るものなのかもしれない。

一度想像してみて欲しい。もし、今この瞬間に家族や友人と引き離され自分一人になってしまったら、どんな思いがするだろうか。おそらく、言い表せないほどの恐怖と絶望が襲うだろう。そして、自らを責めるであろう。「生き残ってしまった。」と。「死んでしまえばよかった。」と。

そんな彼らの悲痛な叫びを、尊い命のうたを、聞きながしてもいいのだろうか。同じあやまちを犯して、歴史を血で染めてもいいのだろうか。

私は、行動だけでなく当時の人々の心情からも、現代に活かせるカギがあると思っている。そして、それを実現する、または実現に少しでも近づけるのが、今を生きる私たちの役目だと思っている。つまり、平和のバトンは私たちに渡されたのだ。

私たちに大きなことはできない。そんな限られた範囲の中でも、私たちができることは「忘れない」ということだと思う。そして「忘れない」の輪が広がっていく。平和の輪、つまり「平輪」なのだ。「忘れない」から「語り継ぐ」へ。そうやって「平輪」が広がっていく。その広げる役目を、前の世代から引き継いだのが私たちだ。精一杯使命を果たして、また、「平輪」を後の世代に繋いで、明るい未来を、みんなで創り上げていくべきではないだろうか。

# 七月十七日

門池中学校　一年
中村文音

七月十七日、父が、

「今日は昭和二十年の太平洋戦争中、沼津で空襲があった日と同じ日だね。」

そう言った。

私が小学生のころ、父と一緒に明治史料館の「平和を考える戦争史跡めぐり」に参加し、御成橋の弾痕を見た。父は歴史に詳しく、夏になると原爆の日や終戦の日を忘れることなく話題に出す。そこで私は、ここ沼津にも空襲があったことを思い出すのだ。

空襲というと、東京大空襲が思い浮かぶが、日本国内二百以上の都市が被災し、被災人口は九百七十万人にも及んでいる。その中で、沼津の空襲は富山の空襲に次いで二番目に建物の損壊率が高かったという。（都市面積の八十九・五％を破壊され、死者は二百七十名を超えた。）

小学校で沼津市明治史料館に行ったとき、戦争時の展示品を見て、当時の質素な生活や空襲の悲惨さを学んだ。頭上に無数の焼夷弾が降り注ぐのを想像し、恐怖を覚えた。火の海の中を逃げろと言われても、火に巻き込まれて焼かれてしまうのではないか。焼け死んでいく人の姿を思うと、足が竦んで動けなくなった。

恐恐と展示品を見ながら友だちに、沼津にも空襲があったことを知っているか尋ねた。すると、大半の友だちが

「知らない。」

と答えた。私だってここ最近知ったことだ。「やっぱりな」と思った。しかし、原子爆弾が落とされた広島や長崎、もしくは、沖縄戦が起きた沖縄の子どもたちは、自分が生まれ育った場所で起こった出来事を、家族や地域の人から聞いて学んでいる。後世の人たちに語り継いでいく形ができている。

沼津空襲の規模は小さいかもしれない。しかし、同じ時代にあった戦争に変わりはないのだ。たくさんの人が命を奪われ、大切なものを失い、多くの建物が壊された。私たちは「知らないまま」を許してはいけない。戦後七十六年。戦争を経験した世代は少なくなり、風化が進んでいる。

――このまま誰も、戦争の話をしなくなったら。

――忘れ去られてしまったら。

現在ある平和を維持できないと、私は思う。一人でも多くの人が沼津の空襲を知り、後世に語り継いでいく必要がある。戦争を過去の出来事として済ませるのではなく、この先、同じ過ちを起こさないための糧としていくべきだ。私たち若い世代が沼津空襲のことを学び、戦争の恐ろしさを理解しなくては。今もなお、世界の多くの場所で争いが起こっていることを知らなければならない。

人を殺して何の意味があるのか。大切な人を奪われた人々に残るのは、深い悲しみと恨みだけである。

私も今一度、沼津の空襲や戦争のことを調べて、平和の在り方を学んでいきたい。来年の七月十七日、私から父に

「今日は沼津で空襲があった日だね。」

そう言えるように。

# 戦争の恐怖

門池中学校　二年

中澤　詠惟

「お前も親と一緒に死んでくれればよかったのに。」

これは、私の読んだ新聞記事に載っていた一言だ。東京大空襲で孤児となった子どもに向けられた、伯母の言葉だという。戦争を繰り返していた当時は、一人では生きていけないたくさんの子どもが孤児になって、親戚に引き取られた。そして、ひどい扱いをされ、つらい思いをした子どもが何人もいたのだ。私はこの記事を読んだとき、戦争がどれほど切ないことなのかを痛感した。何も罪もない人々の自由が奪われ、そして親を失った孤児は邪魔者扱いされる。そんな状況を作ってしまう戦争は、この上ないほど悲しいことであり、再び引き返してはいけない暗い過去であることを強く感じた。

何年か前、私は広島の原爆資料館を訪れ、数々の写真や絵を目にした。だいぶ昔のことで、あまり鮮明な記憶は残っていないが、それでも、そのとき思い知った原爆の威力、そして恐ろしさは、今でも強く印象に残っている。そんな原爆について知ろうと、私は市立図書館で開催されていた、「原爆と人間」パネル展に足を運んだ。そこには、原爆投下によって亡くなった人の写真や、黒い雨に苦しむ人々の絵など、当時の原爆による被害の甚大さを物語る品がいくつもあった。展示されていたパネルによると、地上では、非常に強い熱線によって、温度が三千度以上になり、多くの人が手の施しようがないほどの火傷を負い、中には体中が真っ黒に焦げてしまう人もいたそうだ。被害はそれだけでは収まらず、その後、大規模な火災が発生したり、気圧の変化によって内臓がとび出てしまった人などもいたということを知ったときには、その悲惨さにぞっとした。まさに地獄絵図のようなその状況を一瞬にして生み出してしまう核兵器の怖さを改めて理解した。

核兵器はその破壊力と殺傷力によって、無差別に人々を傷つけ、そして長きに渡って被爆者の心身を蝕(むしば)み続ける。さらに、私の心に原爆の恐ろしさが刻まれていたように、多くの人々の心に深い傷を負わせてしまう。そんな残酷な兵器が二度と使われないようにするためにも、私たち自身が七十六年前の出来事を忘れてはいけないということを改めて実感した。

核兵器の廃絶といえば、今年の一月、核兵器禁止条約が発効されたことが話題になった。それでも、核保有国とされている国は九ヶ国あり、そういった国では、現在も開発が進められている。世界には、まだ一万三千個もの核兵器があるといわれ、中には広島に落とされた原爆の何千倍といった威力を持つものもある。そんな兵器が、核戦争で

はいくつも飛び交うことになると新聞記事に書かれていて、私はその様子を考えただけで、寒気が全身を襲った。絶大な力が備わった兵器が乱用されれば、確実に世界は大混乱へと導かれる。それこそ、絶対にあってはならない最悪の事態である。この世に核兵器が存在する限り、それが実際に起こってもおかしくはないのだ。核兵器禁止条約に批准しない国はきっと、他の国よりも早く核兵器を手放すことで核保有国に攻められることを懸念しているのだろう。しかし、それが本当に最善の策なのだろうか。もしリスクを負うのが危険だと考えるのならば、他の国たちと話し合い、同じタイミングで批准するなど、工夫のしようはあるのではないか。私は、取り返しがつかなくなる前に、核兵器が完全になくなることを願いたい。

私は、今まで戦争についてここまで深く考えたことはなかった。いろいろな情報を得てなによりも分かったのは、戦争や原爆の悲劇はあまりにもひどく、戻ってはいけない歴史であるということ。誰にでも分かることかもしれないが、私はそこまで重大なことだとは思っていなかった。おそらくそういった人が、特に戦争を体験していない若い世代においては、少なくないだろう。戦争というのは、人々を支配する人たちが自分勝手なことをしたときに起こってしまう。そうならないようにするため、一人一人が戦争の醜さをもっと理解しなければならない。そして、自分たちの利益ばかり優先するのではなく、困っている者たちに手を差し伸べるべきではないか。それが、今あるべき世の中なのではないかと私は考える。

# 平和をつくるために

門池中学校　三年
勝　俣　孝太朗

「平和」と聞くと、ぼくの心に静かに響く言葉がある。それは、「Forgive but never forget」だ。直訳すると、「許す、でも決して忘れない」となるだろう。ぼくは日本から離れた国で、この言葉に出会った。

二年前、ぼくは旅行でシンガポールへ行った。シンガポールは、教育、娯楽、金融、医療、物流などにおいて世界的な中心であり、現代的なビルが立ち並んでいた。第二次世界大戦中、大日本帝国に占領されていたと聞いていたが、街中で日本語を見ることはなく、当時の面影は一切見当たらなかった。

ぼくはツアーガイドのリチャードさんにお願いして、戦争博物館の「旧フォード工場記念館」へ連れて行ってもらった。せっかくだから、何か戦争について知りたいと思ったのだ。リチャードさんは五ヶ国語を話す華僑（きょう）の方で、とても親切にしてくれた。

「旧フォード工場記念館」は、第二次世界大戦前後のシンガポールの様子を伝える博物館だ。観光スポットではないらしく、館内はご年配の欧米人の夫婦が一組いるだけだった。日本人が訪れることも少ないようで、説明書きは英語表記のみだった。

第二次世界大戦中の一九四二年、シンガポールは大英帝国による植

民地支配から日本軍による統治へと変わった。ここからおよそ三年間、日本名の昭南島に改名されることになる。占領統治下において、反日分子とされた人が処刑されたり、強制的に日本語を教えたりしていた写真や教科書等が展示されていた。

特に目を背けたくなったのは、シンガポールに住む中国系住民をたくさん殺害したということだ。集合場所に集まってきた華僑を尋問しトラックに乗せて海辺や山中に連行し、機銃掃射で殺害したという。その他にも、思いつかないような残こくな出来事がたくさん並んでいた。

ぼくは、英文の説明書きを電子辞書で調べながら、リチャードさんの説明を聞いていた。写真を見ながら話をするリチャードさんの顔は、怒ったような、悲しそうな顔になり、しばらくリチャードさんに話しかけられなくなった。そして、この博物館のスタッフや見学者の人たちから、自分が日本人だと知られたら何を言われるのだろう、と思って怖くなり、訪れたことを後悔した。

ぼくが一方的に日本人としての恥ずかしさを感じていた時、最後のパネルに目が止まった。「Forgive but never forget」。ぼくは、日本語訳を想像しながら、その言葉をくり返した。その時はその意味がよくわからなかったが、なぜか確かにぼくの心を救ってくれるように感じた。

シンガポールの人たちは、日本軍による占領をネガティブにとらえてはいるが、今の日本人に対して恨みに思っているわけではないのかもしれない、とぼくは思う。戦争の時のことは、かつて起こった史実の一つとして、淡々と展示されていた。戦後七十六年たった今では、多くのシンガポール人は日本人に対して好感度が高く、旅行中もみんな親切にしてくれた。現在のシンガポールはこんなにも豊かで明るく、何よりも発展している。

ぼくは、許すことは、乗り越えることなのではないかと気づいた。第二次世界大戦は、欧米を始め、文字通り世界中で戦争が起き、関わる人を傷つけ、悲しませ、不幸にさせた恐ろしい出来事だ。でも、その憎しみを、今もなお当事者の代わりの誰かにぶつけ続けていたら、戦争は永遠に終わらないし、ぼくたちが大人になっても、歴史の傷を乗り越えられないだろう。ぼくの日々の生活の中でさえも「許す」ことは難しいけれど、許さなければ進めないこともある。ぼくは戦争を知り、歴史を学ぶことが、平和をつくる努力につながるのだと思う。そして、今を生きるぼくたちがお互いを許し、乗り越える先に新しい未来があるということをぼくは信じている。

# 七十六年前からのメッセージ

市立高中等部　一年
尾上　まり

先日、私はテレビのニュースで遺骨収集ボランティアの特集を見ました。遺骨収集ボランティアとは、第二次世界大戦で亡くなった兵士や民間人の遺骨を地中から掘り出して、遺族の元に返している団体の

ことです。その特集では、沖縄で四十年近く遺骨収集ボランティアを続けている「ガマフヤー」のおじいさんの奮闘が描かれていました。

ガマフヤーとは、沖縄の方言でガマは「自然壕」のことを、フヤーは「掘る人」のことを表しているそうです。ガマフヤーのおじいさんはその名の通り、戦争当時に利用したと見られる自然壕やその周りの土を掘って、遺骨を収集していました。

おじいさんは戦後七十六年経った今も、一センチ未満ほどの小さな骨のかけらや歯でさえ一生懸命に探していました。それも、一見しただけで大人か子供か、その場に何人いたかなども把握していました。私はそのシーンを見て、今までたくさんの遺骨と向き合ってきたのだと分かりました。とてもすごいことだと思いました。また、遺骨と共に軍刀や爆弾、手りゅう弾が地中から出てくるのを見て、戦争の生々しさを思い知らされました。

集めた遺骨を遺族に返すには、遺骨と遺族の両方のＤＮＡ鑑定が必要になります。遺骨を集めながら遺族を訪ねて事情を説明し、ＤＮＡ鑑定の申請をお願いするということを日々続けているそうです。おじいさんが言うには次の世代だけでなく、次の次の世代まで続く途方もない作業らしいです。おじいさんは「体力とお金が続く限り続けていきたい。」と語っていました。私は、ＤＮＡ鑑定は結果が出るまでに早くても一年はかかることも知り、気が遠くなるような膨大な時間がかかる活動なのだと、とても驚きました。このような大変な活動をしているということは、おじいさんの戦争、死、遺骨などに対する思いは何十年経っても変わらないのだと思いました。

また、私は別の番組で第二次世界大戦を沖縄で体験した人々の話を聞きました。その人々によると、生きたいと思っていても無差別に殺されていく人々の光景を何度も見たそうです。あちこちに死体がある中を撃ち抜かれた足を引きずりながら歩く人や、畑に食料を探しに来た家族が米軍の火炎放射器で焼かれるのを目の前で見た人など、いろいろな体験をした方々がいました。また、戦後七年経っても遺骨はまだ野ざらしだったそうです。戦争はそれほどすさまじい出来事だったのだと分かりました。二十万人以上もの死者が出た沖縄戦を体験した人々の共通の思いはやはり、一つでも早く遺骨が見つかって遺族の元に戻ってほしいというものでした。

戦争が終わって七十六年経った今も行き場のない遺骨があったり、戦争の記憶が鮮明に残っている人々がいたりするのを知ると、戦争は完全には終わっていないのだと思いました。

終戦記念日である八月十五日に行われた戦没者追悼式で天皇陛下は、

「終戦以来七十六年、人々のたゆみない努力により、今日の我が国の平和と繁栄が築き上げられたが、多くの苦難に満ちた国民の歩みを思うとき、誠に感慨深いものがある。」

とおっしゃっていました。私はその言葉を聞いて、当時の国や家族のために戦って命を落とされた方々の人生があって、今の平和で豊かな世の中が紡がれているのだと気づかされました。

青くて澄みきった海が印象的な沖縄で、このような悲惨な戦争が繰り広げられていたとは、信じられません。もし私がこんな戦争を体験して生き残っていたら、目に焼きついた恐ろしい光景を後の世代に語

り継がなければと思うでしょう。二度と戦争は起こしてはいけない、二度と戦争に関わってもいけないということを私たちは誓っていかなければと思いました。

# 記憶をつなぐ

市立高中等部　一年
芹　澤　芙実香

夏にテレビをつけると、戦争に関する内容がよく放送されています。戦争中の子供達の写真や、戦争体験者の話など、当時のことを深く知ることができます。

八月六日に広島に原爆が落とされ、八月九日には長崎に原爆が落とされました。広島に落とされた原爆の大きさは、長さ約三メートル、重さ約四トン、直径〇・七メートルでした。爆心地から一・五キロメートル以内の建物は全壊し、二・五キロメートル以内の建物は半壊しました。爆風や熱線、放射線などは、人体に大きな被害をもたらしました。特に放射線は、被爆直後の障害だけでなく、後障害と呼ばれ長期にわたり、様々な障害を引き起こしています。

私は原爆のことを、写真などの資料でしか見ることができないけれど、一瞬で大切な人やものを失うことは、想像するだけでも悲しい気持ちでいっぱいになります。そして、もし私が生きていられたとしても、家族や友達が死んでしまっていたら、自分だけ生きているという申し訳ない気持ちになってしまいます。

私には、実際に戦地に行った曽祖父がいました。曽祖父は写真を撮るのが好きで、戦地で撮った写真も見せてもらいました。その写真の中には、軍服を着た曽祖父と、同じ軍隊の人が笑顔で写っていました。他にも、隊長だと思われる立派な軍服を着た人、海などの景色の写真もありました。

曽祖父が行った場所はフィリピンでした。食べる物が無く、畑の作物をぬすんで食べていたら、現地の人にバナナをもらって食べたこと、鉄ぽうの弾が頭の上を通っていったことや、死体が転がっているという異常な状態が続き、何とも思わなくなってしまったという話を母は小さいころからよく聞かされていたそうです。曽祖父は、生前自分の体験を本にしてほしいと言っていました。ですが、自分の体験を本にするという夢を果たさずに、亡くなってしまいました。

今年で戦後七十六年になります。このように、曽祖父と同じ戦地に行かれた方や戦争を実際に見届けた方々が、今は少なくなってきています。だからこそ、私達が曽祖父から聞いたことを作文にして残したり、当時のものを大切に保管したりして、戦争を知らない人達に知ってもらうことが大切だと考えます。きっと曽祖父も、自分がいなくなった後の未来を考えて自分の体験を本にしてほしいと言っていたのだと思います。改めて曽祖父の戦争を伝えたい、忘れないでほしいという気持ちが分かりました。

先日テレビで、戦争を体験した人に話を聞くという番組を見ました。

話をしていた人は、旦那さんが戦争に行ったというおばあさんでした。

「あなたたちは、体験していないから分からないですよね。」

とその方はおっしゃっていました。確かに、体験していない私達にはその時の辛さや悲しさは分からないけれど、戦争を体験した方々が語り継ぐことで、少しは思いが伝わると思います。ただでさえ戦争体験者は少なくなってきているので、その貴重な体験を無駄にしないでほしいです。

最初に書いたように、生き残った人が申し訳ないと思ってしまう、命の価値観をくるわせてしまう戦争は絶対に許せないし、この先も戦争はしてはいけません。技術が発達した今、もし戦争が起こったら、昔とは比べ物にならないような爆弾ができ、前の戦争の何倍もの死者がでるかもしれません。

私がこのように思えたのも、曽祖父の話やテレビで話していたおばあさんのことがあったからです。この戦争の記憶は、絶やさずに多くの人につないでいくべきです。私は、その記憶のつながりが、戦争を二度と起こさない平和な未来を作っていくと考えます。

# 戦争の語り部になろう

市立高中等部　二年
吉川葦生

夕方のテレビニュースで「黒い雨」という言葉を耳にした。（どういうこと？）と思いつつ聞き流してしまった。翌日の新聞の一面に〝「黒い雨」国が上告断念〟と大きな見出しで書かれていた。読んでみると、「黒い雨」とは、広島への原爆投下後に降った、放射性物質などを含んだ雨、原爆の火災で生じたすすなどを含んでいたため、黒色になったということ、それを巡る集団訴訟で、国の援護区域外にいた広島市などの原告全員が被爆者と認められたということが分かった。どれも初めて知る事実ばかりだった。

「黒い雨を浴びたと、やっと認めてもらえた。」と五歳のとき、黒い雨を浴びた八十一歳の人の言葉が書かれていた。五歳という年齢にまず驚いた。それから七十六年間も苦しい思いをしながら生きてきたのだ。正直に言って、その気持ちを平和な毎日を過ごしている自分が想像することは難しい。しかし、現実に今も苦しんでいる人がいるのだ。戦後七十六年がたち、戦争を経験した人たちや原爆にあった人たちは、高齢化し、亡くなった人も多い。なぜもっと早く皆に救いの手を差し伸べることはできなかったのか？未だにそのことで苦しんでいることを知らなかった。戦争はもう終わったこと、過去のことだと思ってい

た自分がちょっと恥ずかしく、戦争を経験した人たちにとってはまだ終わっていない、生きている限り続くのだと思った。

毎年八月になると、戦争に関連したニュースやテレビ番組、新聞記事が多くなる。これまでは他人事のように見過ごしてきたが、黒い雨のことを知ってからは、関心を持って見たり聞いたりするようになった。いろいろ見た中で、長崎の戦争孤児たちのドキュメンタリー番組が心に残っている。一番最初に目に写ったのは、亡くなった弟を背負って焼き場に立つ少年の写真だった。少年は口をきゅっと結び、気を付けの姿勢でまっすぐ前を見ていた。涙一つこぼしていなかった。弟が亡くなって悲しくないはずがない。どうしてなんだ、と思った。がまんしていても涙はこぼれるはずだ。悲しさのあまり、心が空っぽになってしまって、何も考えられなかったのだろうか？それとも、もっと悲惨な目にあったのだろうか？疑問が次々に湧いてくる。この写真は自分の心にぐいぐい入り込んでくる。たった一枚の写真なのに見る人の心を揺さぶり、目に焼き付いて離れない。

番組では、戦争孤児について取り上げていた。戦後、親を亡くした浮浪児と呼ばれる子どもたちが、日本中にあふれていた。彼らはアメリカ軍の命令で施設で育てられることになった。小さい子どもは、年長者を兄さんと呼び、寮母さんをお母さんと呼んでいた。そして仲間は家族だと言っていた。七十六年がたった今でもその気持ちは変わらず、再会したときも、兄さんと呼び涙を流していた。その中の一人は、施設を出れば一人ぼっち、早く自分の家族を持ちたかったと話していた。その後、本当の家族みんなで食卓を囲み笑っている姿が印象的だった。あの弟を背負った少年も、新しい自分の家族を持てたのだろうか、どんな人生を送ったのだろうか、いずれにしても幸せであってほしいと思った。

たった一つの原子爆弾が、多くの犠牲者を出し人々の心に大きな傷を残した。こんなことは、二度とあってはならないことなのに、世界のどこかでは、この瞬間にも爆弾が飛び交い、罪のない子どもたちまでが犠牲になっている。それなのに、そんな悲惨な戦争を経験した人たちの声を聞ける機会はどんどん少なくなっている。僕の曽祖父は、二十一歳のとき赤紙がきて満州へ出征したそうだ。しかし、昨年九十六歳で亡くなり詳しい話は聞けなくなってしまった。聞いておけばよかった。と後悔している。戦争の語り部と呼ばれる人たちの話をぜひ聞いてみたい。そして、自分が語り部になっていきたい。まずは、弟や妹に自分が見聞きしたことを話してあげようと思う。

# 平和な未来を目指して

市立高中等部　三年
岡　希風

「平和」という言葉を聞いて、皆さんはどのような想像をしますか。多くの人が、平和とは戦争のないことだと言います。また、日本は平和だから私たちは幸せだと思っている人も多くいるでしょう。しかし、

世界には、今でもまだ戦争が続いていて、なんの罪もない人たちがたくさん死んでいます。そもそも、もし、戦争がなくなった世界が訪れたとしても、それは本当の平和なのでしょうか。平和には、暴力や戦争のない消極的平和と、貧困や抑圧、差別などがなく、協調や調和のある積極的平和があります。私は、戦争がなくなったとしても、積極的平和が世界中で実現されなければ本当の平和ではないと思います。

では、どうして戦争は起こってしまうのでしょうか。人間は、どうして口があるのに話し合いで解決できないのでしょうか。戦争は、民族や宗教などの考え方の違いや資源、政治によるものなど、様々な原因があります。そのような戦争をなくすには、お互いが相手の意見を尊重し合っていかなければならないと思います。また、日本は唯一の被爆国です。だから、日本には非核三原則というものがあります。しかし、他の国では再び戦争が起きたときのためにまだ原子爆弾や新兵器などの開発をしているところがあります。しかし、もし「戦争が起きたときのため」ではなくて、「戦争が起きないようにするため」にはどうすればいいのかを考えなければ、戦争は無くなりません。

現在、新型コロナウイルスや地球温暖化など、いろいろな対策を講じてもくい止めることのできない深刻な問題がたくさん起こっています。そのような状況下だからこそ、自分たちの利益ばかり追求し相手を批判するのではなく、私たちは互いに手を取り合い協力していかなければなりません。世界中が相手を思いやるようにならなければ戦争は無くならないと思います。私は、英語の授業でgreedyという言葉を知りました。greedyとは、不安と底なしの飢餓感からくるもので、どれだけ手に入れても満たされず、もっと手に入れたい、もっと欲しいと、お金や権力を求め続けることを意味します。そんな考え方では、利己的になり、慈善精神のかけらも抱くことができません。世界中の人たちが協力し合っていかなければいけないこの世の中で、平和という目標を達成するためにも、greedyの考え方を捨てなくてはならないと思います。

私はまだ、大人ではありません。だから、紛争地域に行って何かをすることはできません。しかし、今どんなことが起きているのかを知り、募金など自分に少しでも出来ることを見つけ、実行することはできます。そういったことをみんながするようになれば、少しずつ平和な世界になると思います。

戦争を経験していない私たちは、戦争がどれだけ恐ろしいものかがわかりません。しかし、わからないままだと同じ過ちがずっと繰り返されてしまいます。過去は変えることができなくても、未来を作っていくのは私たち自身です。だからこそ、過去の過ちをしっかりと知り、同じ過ちを繰り返さないようにしていかなければいけません。そのために、戦争の恐ろしさを次の世代へと語り継いでいかなければいけないのだと思いました。